

2025年度 学位論文

歴史の内在的視野から中国における「婦女研究運動」を再考する
——改革開放初期の「民間／本土」意識の系譜

慶応義塾大学 総合政策学部

72101815 王鍾寛

目次

1. 前言	4
1.1 研究目的と背景	4
1.2 問題意識	6
1-3 研究方法と対象	6
2 中国における性別研究の歴史的枠組——文献レビュー	7
2-1 婦聯の役割と理論構築	7
2-1-1 婦聯の史学叙述	8
2-2 学界における用語の生成とパラダイム転換	10
2-2-1 「社会性別(gender)」理論パラダイム	10
2-2-2 「マルクス主義婦女解放理論」パラダイム	11
2-2-3 パラダイムに基づく歴史観	12
2-3 パラダイム転換という視角の限界	14
2-3-1 パラダイム転換に伴う「用語旅行」	14
2-3-2 パラダイム転換によって覆い隠された歴史発生学	16
2-4 歴史の内在的視野の理論的構築	18
2-4-1 宋少鵬の「歴史の内在的視野」方法とその応用	18
2-4-2 『問題に立脚し、中西を問わない』の問題点	20
2-4-3 「歴史の内在的視野」が「用語旅行」現象を突破する上での理論的意義	22
3 「パラダイム」が覆い隠すもの——歴史の内在的視野における「婦女研究運動」	23
3-1 第1期——1983～1989年「本土／民間」意識が顕在化する以前	23
3-1-1 「婦女解放」と「女権主義」	23
3-1-2 「恩賜論」と「超前論」における「女性主体意識」	27
3-1-3 「有性の人」	29
3-1-4 「本源」に向き合った理論構築——マルクス主義婦女理論	31
3-2 第2期——1989～1993年「本土／民間」的な存在としての——婦女研究“運動”	32
3-2-1 鄭州国際学術会議からハーバード論争へ——「本土」的側面の形成	36
3-2-1-1 「本土」を見据えた「婦女」と脈絡	37
3-2-1-2 「本土」を見据えた「中国」脈絡	41

3-2-2 「資産階級自由化」―「民間」を見据えた形成	44
3-2-2-1 「八九学潮」と「鄭州会議」―均衡の崩壊	45
3-2-2-2 「事をなす」ことと「鄭州大学国際聯誼女子学院」―体制内の NGO	46
3-3 第三段階―1993 年以降:「本土／民間」の融合と消滅	48
3-3-1 「本土」に基づく論争と「社会性別」の導入	50
3-3-1-1 「gender」の導入と「社会性別／性別」の翻訳論争	52
3-3-2 「民間」に基づく論争と「民間婦女 NGO」の発展	53
3-3-2-1 「発展」 discourse における「民間婦女 NGO」	55
4. 終わりに	57
4-1. 本研究より得られた知見	57
4-2. 本研究の限界	59
5 参考資料	60

1. 前言

日本では、「ジェンダー問題」に関しては、それを支持する明確で単一の学問的アプローチが確立されていると言えよう。ラディカル、リベラル、マルクス主義などのフェミニズム理論流派。第一波、第二波、第三波などのフェミニズム運動の歴史。そういった学問的定型文を通じて、「ジェンダー問題」の分析に用いられる理論的枠組みは、国際的に通用するフェミニズム理論やジェンダー理論が大部分を占めている。しかし、こうした前提は中国ではまったく一般的ではない。中国における「ジェンダー・フェミニズム」について真剣に考えようとする者は、まず自分の対象をどのように表現すべきかという問題に直面しなければならない。婦女、女性、女人；婦女解放、女性主義、女権主義；性別、社会性別（ジェンダー）；婦女／性別学、婦女／社会性別学。研究対象を何と呼ぶかという問題は、それが引用するさまざまな歴史的、学術的資源と直接関係している。そういった用語に対する明白な意識がないままに、「ジェンダー研究」に入った研究者の多くは、枠組みから見て根本的に異質的な用語混用が起きてしまう。

用語そのものの創造、翻訳過程、およびその応用における方向性の違いは、中国のジェンダー研究における核心的な論争の場を構成しており、過去数十年にわたる中国の婦女解放運動、さらには中国の政治社会制度に対する学術的、政治的認識を間接的に形作ってきた。まさに今日の中国には複数のイデオロギーが共存しており、また特殊な地政学的位置と社会主義婦女解放のユニークな歴史があるからこそ、「ジェンダー」言説の複雑さが空間を提供しているのである。「ジェンダー問題」の歴史研究は、「ジェンダー」の問題であるだけでなく、過去数十年の中国の歴史の位置づけを直接問うものでもある。そして歴史をどう理解するかは、未来への向き合い方にも直結する。このような中国の複雑さと特殊性を意識して、私は中国における「ジェンダー研究」そのものの歴史を整理することに専念した。

1.1 研究目的と背景

当時の歴史的文脈の中で、婦女／女性をめぐる一連の用語がどのように発明され、どのような前提で使用されてきたかを整理することで、それらが「用語の系譜」として存在する様子を比較的明瞭に示すことができるのである。筆者は後の章で論証するように、これら「用語」をめぐる諸論争をたどることで、今日の中国における「性別研究」形成の過程で覆い隠されてきた歴史を側面から明らかにすることができる。そして、まさにこの覆い隠された歴史の中に、中国における「本土の」性別研究系譜が潜んでいるのである。

筆者の考察によれば、中国の「性別研究史」分野においては、主に二つの叙述モデルが中心的な位置を占めている。一つは婦聯モデルであり、これは一貫性のある史学的語りである。その一貫性とは、中国共産党が改革開放を公式に語る際、「改革開放＝社会主義の放棄ではなく、中国特色社会主义の始まりである」と強調するのと同質の語りである。このようなストーリーによって、中国は激しいイデオロギー上の動揺を乗り越え、建国後 30 年と改

革開放後 30 年のさまざまな断絶を繕い合わせてきた。婦聯にとっても、中国の婦女運動は同じ経緯をたどっている。1978 年以前、婦聯は全国で唯一合法的な婦女群衆組織として存在し、「全国の女性の『実家』」かつ党と群衆を結ぶ紐帯として、党の政策を婦女群衆へと徹底させる役割を担っていた。1950 年代に打ち出された「社会に婦女を宣伝し、婦女に社会を宣伝する」というスローガンは、この職責を端的に示している。ところが、改革開放後になると、「婦女解放」理論が幅広く挑戦を受け、また公有制とそれに付随する社会福祉体制も徐々に解体される局面を迎える。こうした状況の中で、婦聯は「中国特色社会主义婦女理論」を提起し、それを思想綱領として掲げたのである。この理論体系は、一方では婦聯が依然として「唯一の公的群衆組織」であるという正統的政治身分を維持するための根拠となり、他方では新時代に即して具体的戦略を柔軟に調整し、あらゆる思想を取り込んででもなお「社会主義」の色合いを揺るがさずに済むという利便性をもたらした。したがって、婦聯および婦聯が主導して編纂した『婦女運動史』にとっては、新中国 70 年の婦女解放の歴史には根本的な断絶など存在せず、婦聯はずっと党の指導のもとで群衆組織としての役割を果たしてきたのであり、幾度かの危機を乗り越えながら党と国家と共に時代の潮流に乗って前進してきたというわけである。

婦聯の一貫性重視のアプローチとは異なり、学界による婦女運動史研究は、「社会性別 (gender) の中国における伝播」という総体的なイメージに根差している。現在、さらには未来の視点から見れば、主導的パラダイムとなっている「社会性別」は、本来であれば性質の異なる出来事を「通時的」な法則のもとで一律に命名し、異なる時代に生まれた用語にも「用語旅行」を可能にしてしまう。こうした中国婦女運動の歴史イメージの中では、1949～1978 年に根ざす「婦女解放」叙事さえも、ほとんど検討されることなく 21 世紀の今日へと移し替えられ、「女性主義」の一員として取り込まれる。さらに改革開放後の歴史も、「社会性別」が席卷する物語へと自然に加えられ、「婦女研究」が本来持っていた特別な思想的ルーツが見落とされるのである。トーマス・クーンの「パラダイム」理論は、このような現象を説明することができる。「マルクス主義婦女解放理論」と「社会性別 (gender) 理論」は、そうした理論的前提のもとで見ると、前者を放棄して後者へ移行するという関係にある。時間的に過渡期に位置する歴史的事象はすべて自動的に後者のものとされ、さらに後者のパラダイムは、あたかもそれが本来そうであったかのように、前者のパラダイムに属する概念さえも書き換えてしまう。どの研究者も自分がパラダイム転換の歴史的ミッションを完遂したとは言わないが、歴史そのものを振り返るとパラダイム転換が起こったことは否定できない。しかしながら「パラダイム転換」という視角から出発し、パラダイムのいずれか一方の立場に立って歴史を研究すると、認識論の次元において「旧パラダイム」や「過渡期」に属する歴史的出来事を軽視する必然性が生じる。研究者は具体的な歴史的背景を顧みないまま歴史を好き勝手につなぎ合わせることで、結果として「用語旅行」の混乱が生じるのである。

1.2 問題意識

以上の研究背景を踏まえると、今日の「婦女運動史」領域においては、まず「用語旅行」が表層的な現象として観察されることがわかる。「用語旅行」とは、エドワード・サイードが提起した「理論旅行(traveling theory)」の理論枠組みにおいて観察される現象として用いられる。サイードの『世界、テキスト、批評家』(1983)で提唱された「理論旅行」概念は、思想が異文化・時空間を移動する過程で変容・適応・歪曲が生じる現象を指す。筆者はこの枠組みを発展させ、「用語旅行」概念を構築した。これは理論旅行の下位現象として、ポストコロニアル的文脈における用語の変容を可視化する分析ツールである。「理論旅行」が国境を越えた空間的移動を主対象とするのに対し、「用語旅行」は同一空間における時間軸上の概念変遷に焦点を当てる。具体的には、ある理論が主導的パラダイムとして確立された際、歴史的事象の再定義が発生する現象を指す。その過程では、特定の時期でしか存在しなかった「用語」は過去の事件を代弁し、任意の概念変遷が起きてしまい、「用語」の混用も各研究内で観察され、まるで用語が「旅行」をしているようであった。

この現象を手がかりとして歴史の生成プロセスをたどるのは有効であるが、そこで止まってしまってはならない。より深い問題として、「パラダイム」的想定による歴史の見方が歴史を覆い隠してきた点が挙げられるのである。このような覆い隠しがもたらす潜在的リスクとして、「パラダイム」は単なる理論的仮定や実践姿勢であって、現実そのものを意味するわけではなく、その有効性は常に現実からの挑戦を受けるという事実がある。したがってパラダイムもまた、現実の要請に応じて理論を微調整し続けるしかないということになる。しかし、「用語旅行」という現象が、問題を示唆する側面としてますます無視できないものになった今、「婦女運動史」におけるパラダイムの表述を根本から再評価する必要がある。そこで本研究では、「婦女運動史」の研究方法を改めて問い直す意義に立脚し、歴史そのものがどのように展開してきたかを再発掘する作業に主眼を置くことにする。その中で、「用語」の生成プロセスを鍵としながら歴史の脈絡を明らかにすると同時に、「用語旅行」問題を解決するために信頼に足る系譜を提示したいと考えている。

1-3 研究方法と対象

「歴史そのものの展開プロセス」を明らかにする——これを「パラダイム」的歴史研究とは異なる研究方法とする際の核心は、外部にある先験的な基準を超え、歴史が生起していた当時から出発することである。具体的には、当時の行動者の主観的世界や客観的条件、および行動者と客観条件の相互関係を重視し、歴史的出来事を単純な直線的プロットで扱わないようにする点が肝要である。この点については、中国人民大学の宋少鵬が自身の理論的枠組みの中心に「歴史の内在的視野」という研究方法を置いて同様の問題意識を示している。宋少鵬にとって、「歴史の内在的視野」とは「歴史行動者から出発し、その土地の問題から出発するのであって、『理論』や特定の仮定を起点とするのではない」という意味であ

る。本研究は、まさに「パラダイム」的研究が招く歴史の覆い隠しを分析した上で、この「歴史の内在的視野」の原則を研究方法として採用し、「用語の生成」をめぐるプロセスを糸口に論述を進めるものである。

加えて、筆者の実際の調査過程において、「用語の生成」は特定の歴史行為主体の存在なしには観察できないことが判明した。改革開放初期の 1980～2000 年代は、用語生成の鍵となる時期であり、この時期に「民間的・本土的」という独自の立場をとった李小江を中心とする「婦女研究運動」は、中国現代の性別研究の用語を形づくる上で極めて大きな影響を及ぼしたのである。その重大な影響ゆえ、現代の「性別研究」学者の多くは、それを中国における近代的性別研究の先駆者と見なし、理論的検討をあまり経ずに頻繁に参照している。だが後に論じるように、こうした直接的な引用こそが、「婦女研究運動」という行動者の歴史を覆い隠し、「用語旅行」という奇妙な現象を生み出した要因でもある。そこで本研究では、「婦女研究運動」そのもの、およびその概念を提唱した李小江を研究対象と定め、用語の生成過程を軸に、彼女が歴史行動者としてどのような時代的課題に直面し、いかなる行動をとったのかを考察することにしたのである。

2 中国における性別研究の歴史的枠組——文献レビュー

2-1 婦聯の役割と理論構築

中華全国婦女連合会(以下「婦聯」で表示)であるが、その公式ウェブサイトでは、婦聯を「全国の各族・各階層の婦女が中国共産党の指導のもと、更なる解放を求めて団結した社会的群衆組織であり、広範な代表性・群衆性・社会性をもつ」と定義している¹。この定義の理解は、婦聯が歴史問題に際していかに慎重でありながらも、実際の活動では大胆な面を見せるのかを把握するうえで欠かせない。

この定義から婦聯を読み解く際、第一に注目すべきは「中国共産党の指導下にある」という政治的属性である。これは婦聯が政治方針や路線において中共の指揮を受け、決して党方針と衝突し得ないことを意味する。実際、婦聯は政府機関とは独立した完整な科層制の職位配置を有しているが、各級の官員は同階層の政府官員による監督・指導を受け、その見返りとして政府の政治的支援と予算を得ている。婦聯の最高執行層である常務執行委員会の構成メンバーは、すべて中央政府が指名し、名目上は婦聯の最高権力機関とされる全国婦女代表大会で選挙によって承認される。婦聯は政治的に党に責任を負っており、その業務は党の方針を貫徹することに仕えている。

第二に、「社会的群衆組織であり、広範な代表性・群衆性・社会性を有する」という社会的属性がある。社会的群衆組織として婦聯は、群衆とつながり、草の根的な視点から群衆のために尽くす社会的責任を負っている。歴史的に見ると、婦聯はまず国共合作期において、中国共産党が婦女群衆の革命を促進し社会的力量を結集するために設立した社会組織で

あった。また当時、婦聯は秘密活動を要する状況から少数の骨幹幹部を他の社会組織に送り込み、群衆を鼓動することでメンバーを増やすしかなかったため、独立した政治団体の形で活動することはできなかった²。この時代、中国共産党は厳しい政治情勢に置かれており、社会組織を通じて党員を増やし、自らの勢力を強化する必要があったのである。改革開放期になると社会活動の場が拡大したため、政府とは別個の「民間」利益団体が生まれるようになった。その結果、婦聯には党と群衆をつなぐ「架け橋・紐帯」となることが求められ、活動の焦点もまた、単に党の政策を補佐するだけでなく、「群衆」に直接応える方向へと変わっていった³。

以上から、婦聯は「政治属性」と「社会属性」の両方を有しており、両者のあいだに本質的な緊張関係があるといえる。この二つの動的関係をどう調整するかは、婦聯が長年にわたって直面してきた課題である。

2-1-1 婦聯の史学叙述

以上のような理論的前提から、婦聯が婦女運動を公的に叙述するときのあり方を検討すると、婦聯が「政治属性」と「社会属性」の両立を図るための戦略が浮かび上がる。すなわち、歴史的事件の叙述において共産党の公式史観を忠実になぞりつつ、婦聯が社会団体として婦女運動に貢献したことを強調するという方法である。婦聯主編の『20 世紀中国婦女運動史』や、婦聯歴代の指導者による資料を調べると、史学領域において、婦聯の歴史叙述が共産党内部の修史方針と同期していること、すなわち「共産党が一貫してリードしてきた」という政治テーマに奉仕していることが見て取れる。これは、大躍進、文化大革命、改革開放、鄧小平の南巡、WTO 加盟など、共産党史上における評価が確定している主な歴史事件の位置づけに対し、婦聯が示す見解が党の公式見解とほぼ一致している点に端的に表れている。

以下の表に示すように、婦聯と中共は、ともに中国現代史をおおむね 4 つの段階に区分している。「1949～1956 年：社会主義の確立期」「1956～1978 年：曲折的な探索と挫折の時期」「1978～1992 年：改革開放初期の中国特色社会主义の創立期」「1992 年以降：社会主义市场经济の全面展開期」といった具合である。両者は統一的な歴史認識に基づいて叙述を展開し、一貫性のある中国近現代史を構築してきた。その文脈において、婦聯と中共の政治的地位は安定を保持しているといえる。

時代区分	婦聯の叙述 ⁴	中共の党史 ⁵
1949～1956 年 社会主義の確立期	「中国共産党の指導のもと、中国は…新民主主義から社会主義への歴史的転換を実現…中国婦女運動は	「毛沢東同志を主要代表とする中国共産党は、全国各族人民を団結・指導して…人民が主人公となる中華人

	歴史的飛躍を遂げ…かつてない情熱をもって経済建設に参画…多くの婦女の自主意識が覚醒し、主体的役割を強め、自己解放を追求する主体となった」	民共和国を樹立…新民主主義革命から社会主義革命と建設への2つの歴史的転換を成し遂げた」
1956～1978年 曲折と挫折期	「党が社会主義建設の経験を欠いていたため…『大躍進』で重大な失策が起こり、婦女運動も挫折を被った…文化大革命前夜まで婦女運動は調整を続けつつ困難な前進を模索していた。文革期…中国婦女運動は深刻な挫折を蒙り…婦女解放を真に促進することはできなかった」	「新中国は困難な探索の中で曲折しながら発展した…性急な目標設定により『大躍進』期に挫折…深刻な経済的困難を克服しつつ前進…文化大革命期には党や国家、人民は中華人民共和国成立以来最悪の被害を受けた」
1978～1992年 改革開放初期・中国特色社会主义の創立期	「改革開放は中国婦女運動に進むべき方向を示し、新時代の活力を吹き込んだ…中国特色社会主义理論は婦女運動に強力な理論的武器を与え…改革開放下で中国婦女運動は活況を呈した」	「中国共産党は全国各族人民を団結・指導し、中国の社会主義建設における正反両面の経験を深く総括…社会主義初級段階の基本路線を確立…中国特色社会主义を創出することに成功した」
1992年以降 社会主义市场经济の全面展開期	「第14回党大会を画期として、中国の改革開放と現代化建設は新たな歴史段階へ突入…計画経済体制から社会主义市场经济体制への移行…この歴史的進程のなかで中国婦女はかつてない広さと深さで社会主義の改革・建設に参加し、中国特色社会主义婦女運動の偉大なる実践を豊かにしている」	「第14回党大会後、中国共産党は全国各族人民を団結・指導し、党の基本理論と基本路線を堅持…社会主义市场经济体制の改革目標と基本的枠組を確立…全面的な改革開放の新局面を切り開き、党建設の新たな偉大なプロジェクトを推進した」

以上を総括すれば、婦聯と中共は歴史問題を扱ううえで高度に一致した叙述パターンをとっており、婦聯が中共の指導下にある群衆組織であることを示す「政治属性」が具体的に示されているといえる。しかしながら、こうした歴史叙述とは別に、現実の社会変化は婦聯が「政治属性」を保持しながらも、「社会属性」をより重視せざるを得ない方向へと促しており、これは婦聯と中共の政治的連関にも影響を与えている。婦聯はもはや「党の社会部門」だけ

ではなく、「党と群衆をつなぐ架け橋」となるよう要求されるため、新時代において自己と社会の関係を再考し、理論・実践の両面で革新を行うことを迫られているのである。

2-2 学界における用語の生成とパラダイム転換

婦聯が公に「女性主義(フェミニズム)」を唱えたことがほとんどないのとは対照的に、改革開放以降、「女性主義」は学術研究において徐々に重要な領域へと成長し、社会でも女性主義への強い関心が高まり、中国の言論空間でも無視しがたい主要な争点の一つとなっている。支持と反対、両論が交錯する中で「女性主義の中国発展史」という問いが大きな注目を集めている。過去に対する想像のしかたが、現在をどう捉えるかを直接左右し、ひいては中国における女性主義の未来像をも形づくるからである。こうした背景から、女性主義の歴史研究は、独自の理論的視座を通じて社会・政治に対する理解や変革の方案を導き出すことが多い。すなわち、「マルクス主義婦女解放」理論と「社会性別(gender)」理論という二つのレンズは、中国の女性主義発展史を論じる代表的な理論パラダイムを形づくってきたのである。

2-2-1 「社会性別(gender)」理論パラダイム

1993年に天津で「中国婦女と発展——地位、健康、就業」というテーマの研究会が開かれ、さらに1995年の北京での第4回世界婦女会議を経て、「社会性別」の視点から歴史を検討する手法が婦女史研究において極めて重要な地位を獲得した。よって「社会性別」を基本的パラダイムとする研究者にとって、中国における女性主義の歴史を研究するということは、おおむね自らの来歴を要約する行為と重なっている。

現在または未来的視点に立って過去を振り返るとき、現代中国における女性主義の展開には複数の時間スケールが考えられる。短期的には改革開放後の30年、長期的には五・四運動期や清朝にまで遡る視点である。

短期的スケールで見ると、「社会性別」の視角からの中国女性主義展開史とは、1980年代の「婦女史」研究を取り込むかたちで発展してきたとされる。

1978～1989年: 婦女史研究が復興し始め、研究主体や主題、参加者の範囲が大幅に拡大した。

1990～1999年: 中国婦女史研究は第2のピークに入り、文化領域では婦女を低俗に消費する現象もあった一方、真剣な学術研究が行われた。主流の史学界では単に「婦女についての記述を増やす」段階から「社会性別」に注目する段階への移行が徐々に進行的した。

21世紀以降: 婦女／社会性別史研究は多元的に展開し、研究目標や手法、関心点がさらに多様化した⁶(杜芳琴 2020)。

この流れにおいて、「社会性別」パラダイムに基づく史学研究は 80 年代の「婦女史」研究の学術資源を直接受け継いだと認識される。その中に、「社会性別」パラダイムが拡大する過程で「婦女史」研究との摩擦は軽視され、「婦女／社会性別」史学が自然に成立したかののような理解が広まっている。

一方、長期的なスパンにおいては、女性主義自体の多様性ゆえ、研究者によって時代区分は必ずしも一致しないが、「社会性別」パラダイムを先験的な起点とすることにおいては共通している。つまり、非常に長いスパンの歴史を単一の学術規範のもとで統合し、「通時性」の原理で事件に名前を付けていくのが特徴である。その結果、80 年代初頭の「婦女研究運動」が「市場女性主義」や「資本主義女性主義」⁷と呼ばれたり、革命に参加して長期間婦聯で活動した「大姐」たちが「国家社会主義女権主義者」と呼ばれたりする⁸。研究者がある歴史上の行動者を「フェミニスト」に値すると判断すれば、「社会性別」の法則が歴史を自在に行き来することを可能にするのである。こうした視点のもと、改革開放後に興った「婦女研究」も、疑いようもなくフェミニズム活動の一部とみなされ、中国の「性別の場」において今生じている諸問題への直接・間接的責任を負わされることになる。現代の「社会性別」パラダイムに異議をとなえない研究者は、李小江を代表とする「婦女研究運動」が「女性主義」としての運動であり、改革開放期の女権運動の先駆けを拓いたと評価する(李勋)⁹。この現状に対する反対者は、社会性別(gender)の観点から、この実践が「社会主義女権主義」時代の「より良い社会性別」戦略を破壊したと見なすこともできる。つまり、「社会主義国家の男性中心的な特徴によって抹殺された女性特質の歴史を探し求め、中国女性の主体性とエージェンシー(行為主体性)を主張しながらも、革命を否定することで、国家の運営過程における女性の反抗行動の可能性を排除してしまった」ということである¹⁰。

賛成と反対の両方の視点において、「社会性別」のパラダイム自体は論争に直接参加しないが、この論争が展開される基盤となっている。これは、フェミニズムの各流派間の内戦であると言える。

2-2-2 「マルクス主義婦女解放理論」パラダイム

まず区別しておくべきのは、「マルクス主義婦女解放理論」と、婦聯が提唱する「中国特色社会主義婦女理論」(以下「中特婦」)のあいだには一見すると連続性があるように見えるが、実際には問題意識にかなりの違いがあるという点である。「中特婦」はもともと、共産党が主導してきた「マルクス主義婦女解放」の経験では改革開放後の現実に対処しきれないため、新しい理論を打ち出したという経緯がある。この文脈では、文革期の婦女解放が「婦女の性差」を無視していたという批判と、80 年代の民間で生まれた「婦女研究」や 90 年代以降に入ってきた「社会性別」理論パラダイムを選択的に取り入れ、新時代においても婦聯が政治的な指導地位を維持できるイデオロギーを確立することに重きがおかれている。その役割は、政治的イデオロギーの上により強く現れている。

一方、学界で「マルクス主義婦女解放理論」が再提起されているのは、主に「社会性別」理論パラダイムに対する反省・批判の文脈からである。単に「社会性別」パラダイムの枠内で階級や労働の視点を強調するのではなく、「社会性別」というパラダイム自体を根底的に否定するという意欲が見て取れる。こうした否定が新たなパラダイム創出の原動力となっているのである。すなわち、改革開放前の社会主義革命期における「婦女運動」の歴史的資源を再評価し、マルクス主義の立場から「婦女」という主体を復権させ、新中国での婦女解放の政治的立ち位置を回復することで、新しい学術パラダイムを樹立しようとするわけである。「中特婦」と大きく違う点は、この「新たな」パラダイムは、実際には政治的には「権力」を持たず、その基盤は依然として野党的な学術的姿勢と言説(discourse)である。参照として、中国国内の「新左派」系の学術的姿勢と立場は、この学術的な意味で「マルクス主義的女性解放」を再提起する試みにより近い関係にある。

このような「社会性別」パラダイム否定の姿勢は、社会学・政治学・史学などさまざまな学術領域で「マルクス主義」再興の潮流を生むと同時に、改革開放以降の「婦女研究」と「社会性別研究」を混同する傾向ももたらしている。結局「婦女研究」は「社会性別」時代への移行の導入段階とみなし、80年代の婦女研究を「マルクス主義婦女解放」から「社会性別」へ移行する過渡期だったと見るのである。たとえば、婦女研究に含まれる「マルクス主義的視野」はあっても、根本的には「婦女を個人の生活実践へと誘導し、個人を方法として巨大な理論叙述を変えようと試みる」ものであり¹¹(陳曦)、或いは柏棣が指摘するように「物質主義女性主義」が生理的な女性らしさを強調したことで、「社会性別」をかえって強化する形になり、再び性別化(re-gendering)してしまったのだというわけである¹²。

「マルクス主義婦女解放」を推進する研究者は、「婦女」という概念を「社会性別」パラダイムに対抗する核心ととらえている。宋少鵬は初期の論文で「婦女」には「社会主義革命とともに生成した主体性」の歴史的実質があると指摘し、改革開放後の「婦女研究」実践で「婦女」を政治領域から引き離してしまったことが、公的領域における婦女の失語化と周縁化を招いたと批判する(宋少鵬 2016)¹³。政治領域を離れた「婦女」は、新時代の「女性」言説に圧迫されて非政治的な意味しか残されず、「生育した中高年女性、あるいは後進的存在」とみなされるようになった。「婦女」はあたかも歴史のメタファーであり、「革命」が当代中国において政治的生命力を失い、日常のなかの陳腐化した言葉になってしまったことを象徴しているとも言える。この「革命」を「婦女」の名で呼び戻し、「社会性別」研究に取って代わろうとするのは、いわば「死者を甦らせよう」という政治的試みなのである。

2-2-3 パラダイムに基づく歴史観

「女性主義の中国における発展」をどのように理解すべきか。実は、この命名自体が一つの問題を内包している——「私たちは自分の対象をどう表現すべきなのか」という問いである。

「女性主義」およびそれと同じ理論的文脈に属する「社会性別(ジェンダー)」をアプリオリ(先験的)な自存のものとして扱うとき、「フェミニズムの中国における発展」は、本質的にアメリカで「フェミニズムはアメリカでどのように発展してきたか?」と問うことと同じ内包を持つことになる。「女性主義は第1波から第2波、第3波へと発展し、今日の姿に至る」という見方をそのまま中国に適用し、「改革開放後の中国でも80年代、90年代、2000年代の3つの波があった」¹⁴というように見なされる。ここでは、「フェミニズム」はすべての歴史を統一的に捉えるための「自存の対象」として便利な存在となり、その存在自体が疑問視されることはない。一方では、改革開放後の市場経済の拡大と個人の自由の開放—その問題も含めて—が「社会性別(ジェンダー)」のパラダイムに尽きることのない研究対象を提供し、「明るい」研究の未来を保証している。他方で、それに対する疑問そのものが、その存在を支える基盤となっている。

これは、マルクス主義者が「マルクス主義婦女解放」の革命的過去から利用可能な資源を掘り起こそうとする努力自体は非常に意義深いものの、過去の経験はすでに過ぎ去ったものであり、改革開放以降の中国社会で起こった劇的な変化の過程において、「婦女解放」という言説が本来持つ政治的な実践は、実際には不在であった。政治的実践の基盤が欠如しているため、「社会的性別」に対する批判は、「革命」の未来への明るい展望と実行可能な計画に基づくというよりも、むしろ「社会性別」が幅を利かせている現状に対する憤りと抵抗に基づいていると言える。

「マルクス主義的女性解放」を堅持する研究者たちは、革命の時代が過ぎ去り、改革開放後に起こったすべての歴史が「婦女解放」の歴史的経験からかけ離れていることに苦悩している。その隔たりは、「社会性別」の拡大の一環として見なされるほど大きく、それとともに批判されるしかない。さらに、野党的な立場と、「マルクス主義的女性解放」が依存する政治的母体—全国婦女連合会(婦聯)自体が「中国特色的社会主義婦女理論」を創始することで過去の実践モデルを捨て去ったことにより、過去の経験を振り返るだけのこの理論は、現実にはその意志を貫徹する力を真には持っていない。これは、「社会性別」を批判対象として失った場合、現実の政治的・経済的基盤を持たない「マルクス主義的婦女解放」は、同時にその存在意義をも失うことを意味する。この無念さは、「婦女解放」が「フェミニズム」をその解釈枠組みとして前提としない限り、真に現実的な意義を持つ表現を得ることができないという点に最も直接に表れている。

要するに、観念的・立場的な出発点からは、「社会性別」という支配的な理論視角が私たちの歴史観を規定せざるを得ない。まさしくこのため、「社会性別」と「マルクス主義婦女解放」の両派が提示する歴史観を総合した際、唯一「合法的」とみなされる(ただし事実とは相当異なるかもしれない)の語り方は、「女性主義の中国発展史」なのである。そしてこの観点に立って初めて両視点をいっぺんに包含できるが、「婦女解放の中国発展史」のように、もはや現実的意義を失ってしまった前提では両方を同時に扱うことは難しいのだ。

こうしたやむを得ない史学誤認をどう説明すべきか。ここでクーンの「パラダイム」理論が有効となる。「社会性別」パラダイムは 1993 年の天津会議にその起源をもつが、その「空前の新しさ」と「開放さ」、そして当時の社会環境との高い適合によって多くの支持者を獲得し、「科学共同体」を形成していった結果、競合相手を排し覇権を握ったわけである。そして「歴史教科書」にその起源を改革開放初期にまで遡らせることに成功した。クーンの言うように、「革命」後の分野では人々はまったく違う世界の中で仕事をしているのだ。一方、「マルクス主義婦女解放」パラダイムは、現代の中国女性主義史研究において大きな揺れ動きの段階にある。一つには、このパラダイムが建国後30年(そのうち文革期の 13 年を除けばさらに短い)の社会主義婦女運動の経験だけを主な資源とするなら、支持者の自然消滅を待つ旧パラダイムにすぎない。しかし他方、現在の中国社会では「社会性別」パラダイムの問題を指摘する声が高まり、多方面の理論資源を総合して現実に即した理論方針を打ち立てれば、「マルクス主義婦女解放」パラダイムが再び活力を帯びる可能性もある。パラダイムの名称が変わる場合でも、その本質は維持され得るし、或いは「女性主義」という名を新たに冠するかもしれないが、生命力は残るという見方もあり得る。

(筆者は「社会性別」パラダイムの転換を「旧パラダイムの超越」とはみなさず、「同時代の競合相手に対する勝利」と描写している。さらに当時の主要な競合相手、たとえば 80 年代の「婦女研究」がパラダイムの枠組みで論じうるのかどうかはまだ定かではないとしている。)

2-3 パラダイム転換という視角の限界

前章において、筆者はクーンの「パラダイム」理論を「マルクス主義婦女解放」と「社会性別」理論に当てはめて説明した。第一に、この理論は両者の内実をよく描写できる。第二に、「パラダイム転換」という次元から、両理論がいかにか「新しい世界」を構築してきたか、その歴史的生成過程を明らかにできるという利点がある。しかし同時に、こうした「パラダイム」的な応用は大きな問題を抱えており、筆者の問題意識の出発点にもなっている。第一に、「社会性別」パラダイムを使うことで、本来そのパラダイムには属さない理論概念が「用語旅行」を起こしてしまう点。第二に、「パラダイム転換」という歴史観が実際の歴史生成を覆い隠し、もともと広い内包を持つ現象に一律の名前をかぶせてしまうという点である。これらの問題について以下で論じる。

2-3-1 パラダイム転換に伴う「用語旅行」

エドワード・サイード(Edward Said)の著書『世界、テキスト、批評家』(*The World, the Text, and the Critic*, 1983)において、彼は「理論旅行」(Traveling Theory)という概念を提唱した。これによると、思想や理論は異文化・異なる時空間を超えて伝播する過程で、意味の変容・適応・さらには歪曲が必然的に生じると強調されている。ここにはオリエンタリズム的な「理論植民地化」の構図がある反面、受容側がそうした理論を抵抗し、そして再創造へ転

化する可能性も孕んでいる。「用語旅行」は、筆者がエドワード・サイードの「理論旅行」の理論生成背景を援用しつつ構築した概念である。すなわち、「理論旅行」の伝播過程において、「用語旅行」は「理論旅行」が孕むポストコロニアリズムの色彩を可視化する表象として観測される。西洋社会で発生した「社会性別(gender)」理論が中国に伝播し主要な研究方法として定着する過程では、不可避的に本土の言説体系に対する圧迫と書き換えが生じた。このプロセスにおいて、「社会性別」概念の相貌もまた一定程度「中国的」特色を帯びるに至ったのである。」

筆者がここで「理論旅行」概念を背景において、「用語旅行」を提起するのは、時間の範疇において以下の現象を記述するためである。すなわち、ある理論が国家内で主導的な理論的パラダイムとして確立されたときに生じる、国家内部の異なる歴史的時期における事象の再定義である。留意すべきは、国家内部における地域間の差異を考慮すると、理論が空間に基づく「旅行」を再び経験する可能性があるため、単純に「国家」内部に限定した記述は限界がある。しかし、筆者が主に対象とするのは、依然として同一空間内で生じる異なる歴史的な事象に対する「旅行」である。イメージしやすい比喻を用いるならば、サイードの意味での「理論旅行」が国境を越えた旅であるとすれば、本研究における「用語旅行」は、ドラえもんの時間旅行に近いものである。

「用語旅行」が生じる具体的な場面を本研究に即して言えば、まさに「社会性別」のパラダイムにおける研究領域において、広範な「用語旅行」現象が現れている。具体的には、ある特定の対象を記述する際に、研究者は完全に同一の意味において、異なる歴史的時期に生まれた複数の用語を同時に使用することが可能であり、それらの用語はその基本的な内包において互いに矛盾することさえある。たとえば、ある論文『建国 70 年以來の海外視点における中国婦女解放』には次のような一節がある。

「第二段階、1980 年代の中国では最初の**女性主義理論学者**が現れ、多くは 1950 年代生まれで、**中国婦女解放理論研究**に先駆的貢献を果たした。大連大学性別研究センターの李小江教授は、**中国女性主義研究の先駆者**である」¹⁵ (鄭 穎 2020)。

こうして、李小江は「女性主義」理論家として、「婦女解放」理論に対して画期的な貢献を果たし、「女性主義」研究の先駆者になったのである。同時に、筆者がこの文章とそのタイトルを一緒に提示する意図は、この例が実際に二つの方向での「用語旅行」を生き生きと示している点にある。一方では、著者がこの文章のテーマを「婦女解放」と設定しているが、一見するとこれは「マルクス主義的婦女解放」のパラダイムに基づく文章のように見える。しかし実際には、「婦女解放」という用語の下に提示されているのは、建国 70 年来の国内外における「女性主義」理論の革新である。ここでは、「婦女解放」はそれまでにない生命力を発揮し、時間と空間の壁を越えて未来へと旅行し、何の代償もなく現在の理論的領域において自らの位置を見出している。それだけでなく、「婦女解放」は「女性主義」内部の分裂と隔たりをも超越しており、女性主義内に多数の流派が存在するにもかかわらず、この学者の筆の

下では、それらすべてが「婦女解放」に包含されるのである。

他方で、李小江に対する記述においては、「女性主義」が過去へと時間旅行し、「婦女解放」という用語の地位を置き換え、李小江の代名詞となっている。しかし李小江自身は再三、「中国女性主義の先駆者」と呼ばれることを拒んできた¹⁶(李小江 2000)。ここで問題の核心は、「用語旅行」という現象そのものにあるのではなく、「用語旅行」の背後に隠されているもの、すなわち歴史を覆い隠す力学メカニズムにある。

2-3-2 パラダイム転換によって覆い隠された歴史発生学

前文の末尾で、筆者は「用語旅行」が一つの表象として、事実そのものに対する判定の正誤は実際には重要ではなく、重要なのはその背後にある歴史的力学メカニズムを探索することであると断言した。これはなぜか？まず、表象そのものに対する表面的な批判に入ると、パラダイムの影響を受けながらもそれに自覚的でない「通常科学」の研究者が世界には数多く存在し、前文の例が示すように、少しでも歴史的常識を持つ読者であれば、その中の事実的誤りを発見することができる。しかし、筆者が最も困惑するのは、史料に最も精通し、歴史的事実を精密に分析でき、その著作において用語を厳密に定義し理解している優秀な研究者でさえ、歴史に対する「パラダイム」的な想像の中で、パラダイムが事前に規定した分析結果を導き出してしまうことである。鄭威鵬は、フーコーの知識考古学的なレベルで 1980 年代の李小江の思想的脈絡とその矛盾した学術的立場について深い考証を行った。李小江が発表した一連の「マルクス主義と婦女解放」に関する論文を考察した後、彼は李のマルクス主義的立場を正確にまとめている。

「李の立場はフェミニズムとは一定の距離を保っている。一方で、李は一貫してフェミニズムを『西洋資本主義の特産物』と明確に定義し、社会主義革命を背景とする現代中国の国情には必ずしも適合しないとしている。これは、李が彼女の批判者と同様に、イデオロギー的にフェミニズムと資本主義を同一視していることを示している。」¹⁷

その後、李の「有性人」概念の考証過程において、鄭は「有性人」という概念と同時代のマルクス主義的人道主義、新啓蒙主義の「主体性」思潮、ボーヴォワールの『第二の性』との内在的関連を全体的に把握し、李小江の「主体哲学」を正確に概括している。

「李小江の『婦女歴史三階段論』……は意識的か無意識的か、同時代の一部のマルクス主義的人道主義提唱者と同質同構的であり、その基本構造は『原生-異化-復帰』……李と同時代のマルクス主義的人道主義者は、いずれもマルクスの人道主義および唯物史観思想の根本である『1844 年経済学-哲学手稿』を指向している。」(46)

「李小江の性別論述が概念的に李澤厚のそれと多くの重複があるとしても……それは直ちに李小江と李澤厚が理論的に同一であることを証明するものではない……むしろ、李の思想を新啓蒙主義とマルクス主義的人道主義の言説的構成におけるある種のハイブリッドと見

なす方が、言説分析上、より強い説明力を持つように思われる。」

『『第二の性』の『女』という概念は、間違いなく李小江の『有性の人』理論により強力な理論的統合点を提供し、彼女自身および同時代の女性の性別経験と異なる理論的言説を一つの存在的全体に統合することを可能にした。』¹⁸

上記のような李の思想的脈絡の源泉に対する考察に基づき、著者は李小江の哲学の根底にある弁証法的唯物論の基礎を正しく把握し、理論的に李小江に対する「本質主義的フェミニズム」批判を正面から反駁している。この点について、筆者は深く共感する。

最後に、著者は李小江の「歴史段階論」を考察し、李小江の「歴史哲学」を分析している。

『『性溝』一書において、婦女が歴史的に貶低され、奴隷化され、隔絶されたことは、歴史的進歩の必然的代価または(婦女の)最終的解放の契機として見なされている……これは(女性の)主体の復帰に対する近代的歴史的想像を指向している。』¹⁹

しかし、李小江のマルクス主義的学術的立場と哲学的基礎に対する知識考古学的認識は、著者が「社会性別」パラダイムが予め設定した結論を突破することを可能にしなかった。著者のその後の叙述において、李小江のすべての理論は「個人解放」と「近代的想像」の一部として還元され、改革開放の先駆けとされた。

「李が努力して構築したこの性別存在論は、中国 1980 年代の人道主義言説の『性的』バージョンと見なすことができ、ポスト文革期の個人解放の呼びかけと緊密に呼応している。」

「李小江の近代性に対する(歴史的)想像は、彼女の主体哲学だけでなく、彼女の歴史哲学思想にも含まれており、同時代の人々の近代性(歴史的)想像と相互に呼応し、意識的か無意識的か、改革開放の動力にイデオロギー的な正当性を提供している。』²⁰

同時に、李小江の思想に頑固に残る「マルクス主義的残余」を処理するために、その主張は単に「既存の階級言説から分離できない」という「新旧言説間の矛盾」として見なされた。中国でよく言われる言葉で言えば、「この人には時代の局限性がある」ということである。

「中国現代婦女研究は、『性別』そのものを問題とする最初の試みであった。しかし、1980 年代のすべての性別に関する議論は、一時的に既存の階級言説から完全に分離することができず、既存の言説資源(中国社会主義言説)を利用する前提の下で、性別問題に関する言説の再構築は、しばしば新旧言説間の矛盾と衝突として現れた。』²¹

李小江という難題を 100 ページにわたって処理した後、著者の思考は手綱を外した馬のように、「中国のフェミニズム言説構築」という大業に向かって突き進んだ。後半の叙述では、叙述の主体は李小江一人に限定されず、「婦女学の学科建設」、「婦聯(妇联)の社会性別受容」、「『社会性別』か『性別』かの翻訳論争」、「婦女と開発 NGO」など、複数のグループにまたがる大規模な事件に拡大した。これは、李小江の思想の異質性を側面的に示しており、フェミニズム学者たちがその裂け目を縫合するためにより多くの精力を費やさざるを得なかつ

たことを示している。残念ながら、このような理論的指向は個々の研究者の「奇想天外な発想」ではなく、中国の「社会性別」史学界におけるある種の共通認識を代表している。李小江と同時代の学者であり、著名なフェミニズム文化批評家である北京大学文学院教授の戴錦華は、その意見が「社会性別」パラダイム下の学者の認識を相当程度代表している。彼女はこの論文の著者が北京大学で交流期間中の指導教員でもあり、彼女自身もその授業で同じ歴史的区分法を述べている。さらに、「社会性別」パラダイムに限定されず、いわゆる「マルクス主義婦女解放」パラダイムの理論的拠点である中国各大学のマルクス理論学院においても、同じ視点を自らの歴史認識の基礎に置き、「社会性別」批判を展開する学者は少なくない。前節で誤りだらけの例文を提供したのがマルクス主義学院の手によるものであるだけでなく、中国人民大学マルクス主義学院で婦女史を研究する宋少鵬教授も、2012年の初期論文において李小江の理論的脈絡を「マルクス主義的要素を持つ……しかし『婦女』の政治性を空洞化した」と称している。その歴史認識は依然として、1980年代の婦女研究運動を「社会性別」の前身とする「パラダイム」的な想像から脱していない。

公平に言えば、李小江とその創設した「婦女研究」は、後の「社会性別」とは関係性を持つことは否定できない。しかし、その思想の異質性とその後に行った一連の「社会性別」パラダイムに対する抵抗も、簡単に無視することはできない。では、歴史的行動者に対する全面的な認識を阻んでいるものは何か？クーンの「パラダイム」理論は再び私たちに観察の視点を提供してくれる。つまり、パラダイムが確立され、それを代替する新しいパラダイムが存在しない場合、その内部の「アノマリー（異常）」はしばしば無視されるのである。ここでの重点は、李小江の思想的脈絡を本質的に社会性別パラダイム下の「アノマリー（異常）」な異質性と見なすことだけでなく、新しい問題、すなわちどのようにして「アノマリー（異常）」が自らを現す新しい「パラダイム」を創造するか、あるいはブルデューの言葉で言えば、新しい「場（シャン）」を創造するかという点にも関わっている。最初の問題に戻ると、「パラダイム」的な歴史想像を構成する力学メカニズムは何か？上記の分析を通じて、その答えは、「パラダイム」自体が自分を代替するものを見つけないことができないため、自らを維持する「通常科学」を不断に生産せざるを得ないということである。

ここまで書いてきたことで、本論文の研究目的は明らかである。それは、李小江とその「婦女研究運動」の歴史的展開過程を考察し、中国の性別問題に対する新しい研究枠組みを開拓する可能性（必ずしもパラダイムではない）を探究することである。その前に、本研究が採用する研究方法——歴史的内在視野について弁別する必要がある。

2-4 歴史の内在的視野の理論的構築

2-4-1 宋少鵬の「歴史の内在的視野」方法とその応用

中国人民大学マルクス主義学院教授の宋少鵬は、2018年の論文で初めて「歴史の内在的視野」を研究方法として提唱した。宋の叙述によれば、「歴史の内在的視野」とは、

「ある先験的な外部基準を超越し、歴史に接近し、歴史に寄り添う努力……行動者が置かれた立体的な歴史的條件を理解し……歴史を広げ、歴史を平板化・線形化することを避ける……つまり、歴史的行動者から出発し、本土の問題から出発し、『理論』やある種の仮定から出発しないことである。」²²

明らかに、宋少鵬が対話している対象は、前述した「パラダイム」に基づく歴史認識であり、当時の歴史的行動者に対する本土化・歴史化的理解を通じて、単なる理論的想像を打破しようと試みている。ここで最も重要な点は、単なる「理論」の視点から離れ、歴史の中の行動者そのものに注目することである。なぜ行動者への注目が「理論」の前提から離れることを意味するのか？宋少鵬は自身の研究の変遷を通じてこの問いに答えている。

2012年、宋少鵬は『開放時代』誌に「資本主義、社会主義と婦女——なぜ中国はマルクス主義フェミニズム批判を再構築する必要があるのか」と題する論文を発表した。この論文で、宋は「社会性別研究と新自由主義精神の適合性」を直言し、1980年代の「婦女研究運動」と「社会性別の中国進出」を一連の出来事として結びつけ、それを「新自由主義が中国に入る経路」として直接批判した。この時期の宋少鵬は、「社会性別」パラダイムの歴史認識をそのまま借用し、「マルクス主義婦女解放」の外部理論的立場からこれらの歴史的出来事を批判していたのである。

しかし、この論文が発表されると、すぐに当時の「婦女研究」の参加者であり、「民間婦女NGO」の組織者の一人である高小賢から批判を受け、関連する歴史的認識を明確にするための対談を要求された。この背景の下、二人は対談を行い、2016年にその成果を「社会性別の中国進出：歴史的経路と理論的反思」と題する口述史資料としてまとめた。この口述史の中で、高は自身が「陝西婦女家庭婚姻研究会」を運営する過程で感じた社会主義遺産の経験を明らかにし、genderが中国に入る際に受けた「本土化」改造を指摘した。この対談を通じて、宋少鵬は「一種の衝撃」を受けたと述べ、1980年代と1990年代を再考する必要があると直言した。

「1980年代と1990年代は、『革命に別れを告げる』ことや改革開放という新時代に共に属するという明らかな共通点を持つだけでなく、異なる時代的性格も持っている。」²³

言い換えれば、高小賢という「歴史行動者」との対談を通じて、宋は「社会性別」パラダイムに対する単なる理論的批判を打破し、歴史の発生学的脈絡を真剣に考えるようになったのである。この背景の下、2018年に宋は広く影響を与えた論文「問題に立脚し、中西を問わない」を発表した。その中で、自身の研究の軌跡を総括し、「歴史的内在視野」を研究方法として提唱し、初めて「婦女/性別研究」を「社会性別」パラダイムの歴史的想像から切り離した。この論文で、宋は「gender」が中国に入る際の「性別観念」と「社会性別」という二つの側面を詳細に分析した。その後、「社会性別」が当時の学界に受け入れられた理由を考察する中で、「社会性別」と同時に存在した「婦女研究」が実際には社会主義革命期の主体構築方式を継承する役割を果たしており、「社会性別」は「婦女研究」の新しい「方法」として導入されたことを発見した。つまり、「婦女」主体と新しい方法としての「社会性別」に対する二重の

注目の中で、「婦女/性別研究」が新しい学問分野として提唱されたのである。その背後にある問題意識は、社会主義革命期の重要な遺産である「婦女」主体への認識と、新しい思想としての「社会性別」研究方法の「本土化」改造志向が融合し、「中体西用」的な学問構築が達成されたことである。補足として、宋は婦聯が「社会性別」を受け入れる過程を分析し、「マルクス主義的婦女観」（後の中国特色的社会主義婦女理論）もまた、マルクス主義的婦女解放を指導的地位に置きつつ、「社会性別」理論を「道具」として応用したことを指摘した。最後に、以上の論証過程を通じて、宋は「婦女/性別研究」を一つの概念として固定し、時代の発展に伴い、「性別研究」が「婦女/性別研究」と相対する研究パラダイムとして、「婦女」から「性別」へと研究の重心を移し、次第に主流の研究パラダイムとなったことを指摘した。両者の本質を総括する際、宋は「婦女を中心とする婦女/性別研究は「平等」の物語を継承し、性/別研究を支えるのは『自由』の理念である」と直言した。

全体的に見て、宋の整理を通じて、歴史は確かに「社会性別」パラダイムの下とは全く異なる様相を呈している。「社会性別」が中国に入る過程は、もはや「侵入—反応」という古典的なポストコロニアルのテンプレートではなく、中国本土が主導し、再改造した性格を持つものとなった。「婦女研究」は、単なる「社会性別」の中国進出の先導役から、中国本土の性格を持つ研究枠組みへと変容した。「婦女/性別」研究は、「婦女研究」の平等理念を継承しつつ、「社会性別」を「拿来(持ち込み)主義」的に応用した、先進的かつ現代的な発展可能性を持つ全く新しい研究パラダイムとなったのである

2-4-2 『問題に立脚し、中西を問わない』の問題点

しかし、筆者が李小江の個人思想的脈絡における核心的な問題意識を考察した結果、この方法論的に画期的な論文はある程度、「婦女/性別研究」そのものに対する非歴史化的な想像に陥っていることが明らかになった。具体的には、宋が論文の中で高小賢、杜芳琴、李小江といった「行動者」の問題意識を掘り下げ、具体的な歴史的脈絡の中で「内在的一貫性」を持つ「婦女/性別」研究枠組みを構築しようと努力しているにもかかわらず、その過程において「婦女/性別研究」形成過程における衝突が軽視され、無視されている点である。このような無視の下で、「婦女/性別研究」は一つの全体として、その内包がしばしば互いに矛盾しており、これらの矛盾は再び「用語旅行」の形で混用されている。具体的には、「婦女/性別」と「婦女/社会性別」、「本土的」と「本土化」といった用語が論文の中で同義語として扱われている。しかし、まさにこれらの用語の混用が、「婦女/性別研究」の内在的不整合性を浮き彫りにしているのである。

なぜ「パラダイム」的な歴史的想像を克服しようとする研究方法が、同じ過ちを犯してしまうのか？その鍵は、宋がこの論文において、一連の出来事の歴史的発生的な深い探求を実際には行っていない点にある。つまり、具体的な歴史的行動者、例えば李小江がなぜ特定の用語の用法に固執したのかという理由に対する深い探求が依然として欠けているので

ある。「本土的」と「本土化」という用語の差異を評価する際、宋は質的な違いを量的な類似で置き換え、最終的に両者には立場の違いがないという結論を導き出している。

「身体を張って本土的探求を行う行動者たちは、行動戦略においても差異よりも類似点が多い：三人とも協力を重視し、体制内外、中国と西洋、国家と民間のさまざまな資源を統合して自分たちが関心を持つ事業を推進することに長けている。理論的関心点が少し異なるだけで、立場には原則的な違いはなく、問題意識、行動戦略、目標追求の面ではさらに多くの共通点がある。」²⁴

では、宋が考える「本質的な違い」とはいったい何を意味するのか？宋にとって、本質的な違いの基準は「**本土資源への重視と西洋フェミニズムへの排斥の有無**」である。確かに、李と高らはこれらの基準に対する態度において相当の統一性を持っている。しかし、李小江は繰り返し「本土的」と「本土化」の質的な違いを指摘しており、その違いは存在論的な意味で「本土」資源を堅持することにあるとしている。前者は「この土地の歴史、文化、人文、社会的特色」を堅持する前提で外部資源を選択的に吸収するものであり、後者は西洋の「フェミニズム」理論を前提として、本土の状況に応じて適宜変更を加えるものである。この本質的な違いは、宋の論文では過小評価されていると言わざるを得ない。

しかし、問題の本質はこの基準が公正かどうかではなく、依然として外部の理論的視点から歴史的行動者の選択を評価しており、行動者の問題意識の発生学的メカニズムに対する深い探求に至っていない点にある。この状況下では、宋が「本土化」という表現に内在する不安や李小江の「本土的」という用語の真意を正しく捉えていたとしても、この不整合性を処理することはできない。

「本土化は議論を中－西二元構造に限定せざるを得ず、外来概念が如何に本土の文化と状況に適応するかという論題に焦点を当てるため、結局は西洋中心から抜け出せず、議論は拒絶か『学びが足りない』かの対立的な二極思考に陥りやすい。そのため、李小江は本土・本位に基づく『本土的』概念を提唱したのである。」²⁵

この鋭い総括を導き出した後、宋は「本土的」に関するすべての議論を突然打ち切り、その後の叙述ではこの記述がなかったかのように「本土化」と「本土的」が混同されていく。この混同は、後文における「婦女/性別」と「婦女/社会性別」の混同に直接つながっている。実際、杜芳琴が一貫して歴史に対するパラダイム的な叙述を行い、後に社会性別の存在論でマルクス主義の存在論を置き換えた著作を出版したこと、あるいは高小賢が「陝西婦女婚姻家庭理論研究会」の運営後期において外国 NGO の運営組織モデルへの接近と「市民社会」の構想を試みたことなどは、いずれも「本土的」という根本的な定位を堅持できておらず、まさに「本土化」の叙述に符合している。「婦女/社会性別」と「婦女/性別」を一体化した新しい「婦女/性別」研究枠組みも、社会主義の「平等」という遺産を継承したユートピアではなく、存在論的に「婦女」の政治的基盤を揺るがす疑わしい分析枠組みなのである。

2-4-3 「歴史の内在的視野」が「用語旅行」現象を突破する上での理論的意義

上記の先行研究に対する批判から、先験的な「理論的基準」を用いて歴史的出来事の評価することが、いかにして私たちを「用語旅行」の泥沼に陥らせたかが明らかとなる。宋少鵬が「婦女/性別研究」の理論的枠組みにおいて現れた「用語旅行」の問題を扱う中で、この現象を解明する手がかりを提供している。宋はその論文の中で、「歴史的内在視野」を研究方法として提唱し、その根本的な要求として次のように述べている。

「歴史の中の行動者を真に理解するためには、歴史の中に入り、歴史的行動者に接近し、その時代と場所に立脚しなければならない。」²⁶

この研究方法を貫徹するためには、筆者は行動者の一人称視点から出発し、歴史の発生的プロセスを徹底的に把握する必要がある。当時、学問建設が始まったばかりで、学問的枠組みに対する「理論的」想像がまだ定まっていなかった時代において、各研究者が「用語」を厳密に定義し、その政治的立場を選択した背景には、自身の理論体系を構築する時代的要請が隠されていたことを認識しなければならない。宋はこの論文において「中/西、古/今の葛藤から脱する」ことを望んでいるが、それは歴史的行動者自身が「中/西、古/今」の対立に直面した時代的要請の中で行った歴史的選択の重要性を軽視するとは意味すべきではない。「社会性別」が中国に入る歴史的発生的プロセスにおいて、いわゆる「婦女/性別研究」枠組みの研究者たちも参加していたことを直視しなければならない。当時の研究者たちが実際に直面した中西洋や古今の選択の歴史的難題を直視することで、初めて現代の時代においてそれらから「脱却」し、軽装で進むことができるのである。

まさにこの意味において、李小江とその提唱した「婦女研究運動」の概念を再理解することは重要な理論的価値を持つ。中国で初めて「マルクス主義的婦女解放」の「陣地」から独立した「婦女」の声を発した研究者として、西洋フェミニズム著作の翻訳を組織した最初の研究者の一人として（「社会性別」概念が中国に入る以前）、1992年のハーバード会議で西洋フェミニズム学者に明確に反対した「本土」研究者として、名声を確立しながらも1995年の世界女性会議への出席を明確に拒否した「民間」研究者として、学問建設において「婦女/社会性別」という名称を拒絶した研究者として、1992年以降は「婦女理論」研究を行わず、代わりに「発展 NGO」と民間女性の口述史の収集と整理に専念した研究者として、李小江の問題意識は確かに同時代の研究者たちとはある程度独立していたと言える。「歴史の内在的視野」の研究方法から出発し、李小江の思想形成の歴史的発生的プロセスと一連の歴史的出来事との相対的關係を整理することで、筆者は李小江という歴史的行動者の視点に接近し、行動者の視点から歴史の生成を反観することを目指す。

「歴史の内在的視野」から出発することは、徹底的な主観的視点を意味する。現在の理論や「未来」の理論的予測から出発するのではなく、歴史的発生的プロセスを当時の行動者が直面した時代的現実と不安に組み込み、行動者そのものを歴史的生成の構築力として捉え、行動者の理論構築を歴史的発生的と共に変化させることを意味する。同時に、行動者の

思想を漫画的に理解し、自身の都合に応じて随意に切り取る「理論本位」の歴史研究を拒絶することも意味するのである。

3 「パラダイム」が覆い隠すもの——歴史の内在的視野における「婦女研究運動」

3-1 第1期——1983～1989年「本土／民間」意識が顕在化する以前

「新時期の婦女研究は中国大陆においてまったく本源的に誕生したものであり、それは社会主義による婦女解放の産物であって、西洋の女権運動の結果ではない」。これは李小江が80年代の「婦女研究」を30年後に振り返った際に下した総括である。ここで言及される「中と西」「資本主義と社会主義」の対立、あるいは後世の視点からの判断はひとまず脇に置くとして、李小江が強調する「本源性」とはいったい何であろうか。これを解明するには、80年代当時の李小江の理論の脈絡に戻り、歴史的生成のプロセスに遡って、彼女が意図した「本源」という概念がどのような対象との対話を図っていたのかを検討しなければならない。そして、まさにこの「本源」への深い理解こそが、李小江が「中国」から「本土」へ、「婦女研究」から「婦女／性別研究」へと歩みを進めながら、一貫して守り続けた学術的関心と立場を支える土台なのである。

3-1-1 「婦女解放」と「女権主義」

1984年、李小江は『未定稿』に「マルクス主義婦女理論の研究発祥と要点」を発表し、同年『マルクス主義研究』に「人類進歩と婦女解放」と題する論文を掲載した。これら2つの論文はほぼ同時期に公表されたもので、李小江の初期の主張をまとめたものである。その後数十年にわたり、李本人はこれらを折に触れて引用し、自身の活動を理論的に支える基礎として用いるとともに、必要に応じて修正や再利用を行った。また、この2つの論文は、李小江の学術・政治的立場を大きく方向づける役割を果たし、同時に彼女が「女権主義(女性主義)」に対して一貫して妥協しない姿勢を貫くうえでの契機ともなったといえる。

「マルクス主義婦女理論の研究発祥と要点」において、李小江は「マルクス主義婦女理論」を発展させようとする理由と、マルクス主義の立場を明言している。

「わたしたちは、マルクス主義の歴史唯物観と弁証法的唯物論の方法を用いて、婦女に関する一連の問題を明らかにしなければならず、そうすることで人類科学の一部として、マルクス主義の婦女理論体系を打ち立てるべきである」²⁷

この時点で李小江の基本的理論的背景は、「歴史唯物論」と「弁証法的唯物論」をもって「人類科学」としての「マルクス主義婦女理論」を構築しようとするものであった。この方法論に基づき、李は西洋女権主義運動の歴史を一通り整理したうえで、「女権主義」は「婦女解

放」の一部ではあるが、歴史唯物論の視点から位置づけると、次のように定義できるとしている。

『女権主義』は基本的に 20 世紀に生まれた『雛形の婦女理論』に属している。この流れは『基本的に社会学的性質をもつ』もので、『現実の生活における具体的問題を主な出発点』とする。それは『人類科学』の婦女理論とは区別されねばならない²⁸

李小江による「女権主義」を「雛形的理論」とする定義を理解するには、彼女が「婦女解放」という語に込めている歴史唯物論的前提を検討する必要がある。歴史唯物論においては、歴史とは低次から高次へ、奴隷から自由へと進むという目的論的な様相を持ち、社会主義中国においてはこの歴史観は「五段階論」としてまとめられてきた。すなわち、原始時代、奴隷時代、封建時代、資本主義時代、共産主義時代と段階的に進化するという歴史像である。「婦女解放」という言葉は、中国の社会主義革命と同時に生まれた用語であり、婦女の生存状況を上記の歴史段階との対比によって測るものである。「婦女解放」はあくまで「客観的」事実を記述する語として存在しており、「女権主義(女性主義)運動」との関係は同格ではない。むしろ、「女権主義」は「婦女解放」を実現するための特殊な様式にすぎず、両者は必然の関係にはない。ここには、もう一つの対立が潜んでいる。すなわち、中国では「婦女解放」は女権主義運動によって成し遂げられたのではなく、社会主義革命によって成し遂げられた、という対立である。

まさに「女権主義」に対する目的論的な仮定のもとで、李小江は「女権主義」を「現実生活における具体的な問題を出発点とする」**社会学的性質**のものと見なし、自身が発展させようとする「マルクス主義的婦女理論」を**人類科学**の発展と位置づけた。言い換えれば、フェミニズムが主導する「婦女解放」は、社会主義革命が主導する「婦女解放」に比べて遅れており、したがって前者は比較的低いレベルで女性の「権利」を求めることしかできないが、社会主義革命による「解放」を経験した婦人は、平等な権利の上に立って「人類科学」の探求を開始し、マルクス主義が約束した「人間の自由で全面的な発展」を達成することができるというのである。

しかし、この歴史唯物論を用いるにあたって、李小江は従来のマルクス主義婦女解放理論と大きく異なる道を進む。すなわち、従来の「婦女解放」は無産階級の解放によってしか達成されないとされ、マルクス主義から「婦女」だけを抽出して理論研究を行うことはイデオロギー的に正統とはみなされなかった。ところが李小江は「人類進歩と婦女解放」において、婦女解放を無産階級の解放から切り離し、婦女が独自の脈絡を持つことを主張する。そして婦女の解放を「人類解放」の流れに帰属させるため、「五段階論」とは別の「三段階論」を提示する。

「婦女の社会的地位を歴史的に考察すれば、これまでのところ、婦女の社会的地位の変遷は、社会発展の 5 つの形態とは異なることがわかる……それは大きく 3 つの歴史時代を経た。すなわち一、母権時代、二、奴隷時代、三、解放時代である」²⁹

この「三段階論」は「五段階論」と同じ歴史唯物論の分析方法を用いながらも、内容はかなり異なる。たとえば、女性の「奴隷時代」は「五段階論」での奴隷時代と封建時代の両方を包括している。また、「解放時代」は資本主義時代と共産主義時代を合わせたかたちになっている。この三つの段階は、歴史における女性の三つの存在形態、すなわち自然形態、家庭形態、社会形態とも呼応している。

第一の母権時代では、人類は生存と繁殖を最大目的としており、生産力の不足から「自然に選択される」生活を余儀なくされていた。この段階では生殖能力をもつ女性が「自然に」最高の権利を持っていた、と李小江は記す。これを彼女は人類史の「自在」段階と呼んでいる。その後、父系社会が出現し(李小江はその理由を明確に論じてはいない)、人類生活の最高の目的は「より良く生きること」に変わり、その結果、人類活動の基本的方式は、人類の自然な存続を生産することから、富を創造する生産労働へと転換した。この時代の目的論の下で、より高い原始的な労働力を持つ男性がその支配的地位を確立し、父権時代、すなわち女性の奴隷時代を開いた。この時代において、財産の有効かつ確実な継承の必要性から、父権社会は一夫一婦制の婚姻制度を確立し、婦女を社会生産から排除し、家庭内の人口再生産に押し込めた。最後に、まさに家庭形態との対比において、李小江は資本主義時代を女性の「解放時代」と指摘した。李は、資本が女性の労働力を必要とする動機が婦女解放の目的によるものではないことを否定しているが、資本が婦女を家庭から社会へと転換させる過程において、家庭内での夫権による女性の奴隷状態が社会における階級的奴隷状態に転化し、婦女が社会の視点から自分自身を再認識する可能性を開いたことを肯定している。

李小江が三階段論を論じる際に、歴史をあまりにも大まかに概括し、段階転換のダイナミクスを十分に説明していないという理論的な欠点はあるものの、彼女の主な意図は、人類の歴史において、両性の発展と進化が完全に同期しているわけではないという点を説明することにある。男性が自然的存在から自覚的存在へと社会形態を転換させた時代は、女性が社会生産から退き、奴隷状態にあった時代でもある。資本主義が労働者階級を搾取する一方で、婦女を再び社会生産の場に戻すことで、婦女解放に寄与したという点も指摘されている。

歴史唯物論に基づいて女性解放を段階的に区分した後、李小江は、マルクスの人類歴史の段階区分が生産力の発展、階級構造、男性文化に根ざしていると指摘する。そして、婦女が奴隷的な社会的地位に置かれたことは、このような歴史発展の自然な産物であると同時に、婦女の疎外の歴史でもあるとしている。これにより、李小江は「婦女」というカテゴリーを伝統的なマルクス主義の歴史唯物論の五段階論から分離し、生産力の発展や両性の社会的権利の平等が自然に婦女解放をもたらすわけではないことを確認した。婦女の最終的な解放を達成するためには、伝統的な父権文化を批判し、新しい「文化的・倫理的秩序」を発展させる必要があると主張する。さらに、フリーエなどのマルクス主義の先駆者たちが「婦女解放の程度は人類解放の程度を測る尺度である」と断言したように、婦女解放の達成

は人類解放の政治的・倫理的な高みに位置づけられる。したがって、婦女理論の発展は人類科学の発展を意味し、これが李小江が提唱する「マルクス主義的婦女理論」の理論的根拠となっている。

以上2本の論文を総合すると、李小江は当時、きわめて矛盾をはらんだ総合を試みていることがわかる。一方では、彼女は従来のマルクス主義婦女解放理論と同じ認識論的基盤を共有しながらも、「婦女」の存在論的分析に踏み込み、「婦女解放」を無産階級解放に従属させず、(資本主義的)女権主義との接点もあり得るという結論を示す。これは伝統的な「マルクス主義婦女解放」への挑戦であり、当時、婦聯をはじめとする党内の女性幹部から批判を浴びる一方で、女性知識人のあいだではある種の共感を得た。2年後には高小賢も同様の視点から、婦女解放と無産階級解放の相対的独立性を説く論文を発表している。

他方で、李小江は「婦女解放」と「女権主義」のあいだに常に緊張関係を張り巡らせる。王玲珍は、李小江の思想と同時期の欧米における本質主義フェミニズムを比較し、以下の共通点を指摘する。「第一に、いずれも従来のマルクス主義婦女解放理論に対して疑義を呈する。第二に、『女性主義の实践(婦女解放)』を一つの独立した体系または領域として扱う。第三に、伝統的な機械的で硬直的なマルクス主義経済決定論を批判し、『反男性中心の女性文化』を作らなければ最終的な婦女解放は不可能だと説く」³⁰。しかし、これらの共通性をもって李小江を本質主義フェミニズムに帰属させるのは公平ではない。李小江にとって、マルクス主義婦女解放を批判することは、歴史唯物論における目的論を認めないということではない。彼女は「婦女解放」を「人類解放」の未来像の一部として位置づけ、新中国の社会主義革命がもたらした男女の社会権利の平等を肯定している。むしろそこから出発し、「公有制の社会主義的性別平等体制」における男女関係を分析する際に発生する理論的限界を乗り越える新しい思考法を探ろうとしているのである。本質主義フェミニズムのように、社会主義的実践そのものを存在論・認識論のレベルで否定するのは、根本的に異なる。「婦女解放」と「女権主義」の緊張関係を維持するために、李小江は自らの理論構築において「女権主義」を歴史唯物主義の目的論的な図式において「道具的」に利用しようと試みているのである。そして、それを「雛形の婦女理論」として貶めることによって、そこに含まれる政治性の前提を揚棄しようとしているのである。

総合すれば、李小江は80年代、このような理論フレームを打ち立てようとしていた。すなわち、歴史唯物論にもとづいて「婦女」を存在論的に抽象すると同時に、そこから伝統的マルクス主義が扱ってこなかった新しい視点を得ようとする。また、同時期の西洋女性主義理論についてはあくまで「道具的」活用を目指し、それを独立の政治的原理には昇格させない。李小江が直接対話していた対象は、新中国前30年の社会主義婦女解放の实践であり、そこに生きてきた自身の経験、さらに歴史唯物論的な観点から見た女性の歴史観が根底にあった。これこそ、李小江が30年後に80年代の婦女研究の起源を「本源性」と呼ぶ理由である。つまり「婦女」という問題は、革命の発展から自然に生じたものであって(『探索』p.79 参照)、西洋の女権主義の輸入によって引き起こされたものではない、というわけであ

る。

3-1-2 「恩賜論」と「超前論」における「女性主体意識」

もともと、李小江は女権主義を「婦女解放」の歴史過程に包摂し続ける態度をとりつつ、一方で社会主義体制を堅持する立場を明確にしていたが、1980年代のこれら2本の論文には、社会主義構造や資本主義構造が「婦女解放」にどう影響するかという具体的分析が乏しい。また、社会主義体制下で「婦女解放」をどのようにさらに発展させるかという議論も十分に描かれてはいない。社会主義という平等体制を前提とする一方で、改革開放がその体制をどの程度動揺させるかという問題意識が欠けている。ここには、李小江が同時代の「新啓蒙運動」の思想家と共有していた一種の楽観主義がうかがえる。そして、改革開放によって顕在化しつつあった婦女問題に対応するため、李小江が提示したのが、のちに研究者から繰り返し言及され、婦聯から厳しい批判を浴びた「恩賜論」と「超前論」である。

「超前論」とは、社会主義革命がまだ生産力の十分に発展していない段階で婦女解放を「先取り」してしまったことを指す。これにより、婦女には社会生産と家事労働（人口再生産）の二重の負担が課せられ、男性は当時の生産力レベルを超えた社会福祉負担を担う羽目になった、というわけである。ここにはマルクス主義的な経済決定論が見いだせる。すなわち、ある社会の生産力レベルが、その社会制度を規定するという基本前提である。李小江の見解によれば、社会生産力の正常な発展法則に従う場合、産業革命を経ずに婦女が自発的に社会へと参画し、その過程で婦女の主体意識の成長が促されない限り、婦女が自覚的に社会活動に参加し、その中で自己の価値を実現しようとする願望が自然発生することはほぼあり得ないとされる（『出路』p127）。一方、「恩賜論」とは、中国における婦女解放が、婦女集団に高度な主体意識が未成熟な段階において、社会主義体制から「恩賜」として与えられたことを指摘する概念である。このプロセスは短期的には婦女の膨大な社会的潜在力を動員し、解放の進展を加速させた反面、長期的には婦女の社会依存心理を深化させ、主体意識の形成を阻害する要因となった³¹。

経済決定論に対置される「恩賜論」の理論的基盤は、より単純な政治的判断に近似する性質を有している。婦女に依存心理が内在するという前提設定の下、中国の「婦女解放」プロセスにおいて婦女の「主体意識」が関与していないと断じる立場である。ここに見られるように、「超前論」と「恩賜論」は異なる理論的基盤を有しており、まさにこの相違が後年の李小江の思想的文脈における両者の位置付けの差異を生み出した。前者については、李小江がその後も「歴史的発展段階の客観的必然性」として堅持し続けたのに対し、後者に関しては「自ら後に反省を重ねた部分であり、1990年代以降の婦女オーラルヒストリー研究へ転換する契機となった」と述懐している。このように理論的系譜に対する差異化された評価態度は、両概念が持つ歴史的妥当性に関する彼女の認識の深化過程を反映するものといえよう。

「恩賜論」と「超前論」が李小江の思想的文脈において占める位置に関する議論を一旦留保するならば、1980年代という時代状況においてこれら二つの理論が提起された目的は、改革開放がもたらした一連の婦女をめぐる社会問題に対して積極的な解釈枠組を構築することにあった。これらの理論に基づけば、当時発生した婦女問題の大部分は、生産力発展水準と婦女解放の進展度が未だ調和していない状態に起因すると説明された。この不均衡は必然的に改革開放という文脈において、婦女の「実質的地位」に対する「還元」を導くものとされた。

この「還元」は「経済的地位」と「思想観念」の二つの次元で顕在化すると分析されている。具体的に言えば、経済的地位の還元は、生産力の客観的発展法則に従って一部の婦女が家庭領域へ回帰する現象、あるいは第三次産業など当時の生産力水準に適合する新たな産業分野へ婦女が配置される現象を必然化する。他方、思想観念の還元については、李小江が過度に楽観的な見通しを示したことが指摘できる。必要な論証過程を経ずに、彼女は婦女の思想が「良妻賢母」という伝統的規範へ後退することはなく、むしろ社会と家庭の二重の圧力のもとで女性の主体意識が覚醒し、自発的に婦女解放の道を模索すると断じたのである³²。

最終的に「還元」の全体的趨勢を評価するにあたり、李小江は再び歴史唯物論を理論的根拠として援用し、「還元」が退行を意味するのではなく、男女平等の社会的・法的保障が確立された歴史的条件下で「一步退いて二歩進む」積極的選択であると位置付けた。この分析枠組は、社会主義体制下における婦女解放の矛盾を生産力発展の段階論的視座で相対化しようとする意図を反映しており、当時の体制内フェミニズムが抱える理論的限界とその戦略的妥協性を浮き彫りにするものである。

明らかに、改革開放がもたらした婦女解放の「還元」に対して、李小江は積極的で開放的な態度を示していた。前述の婦女問題の成因に関する判断を基に、彼女が新時代の婦女問題に対して提示した「出路」も「経済的地位」と「思想観念」の二つの側面に集中していた。一方で、李小江は改革開放が提唱する社会生産力発展の時代的要請を積極的に支持し、絶えず発展する生産力の下でのみ婦女解放の十分な物質的基盤が整うと指摘した。他方では、婦女の思想観念の発展趨勢に関する楽観的な見通しに基づき、彼女は現代婦女が「不平等な歴史的基盤と現存条件下で積極的に社会に参加し、不平等な社会環境における平等な競争への思想的準備を整える必要がある」と提唱した。さらに、社会への積極的参加を「女性主体意識覚醒の前提」と位置付けたのである。

李小江がこれほどまでに婦女の「主体意識」の覚醒を重視したのはなぜか。彼女が改革開放を婦女解放の貴重な機会と見なしつつも、その負の影響を過小評価した理由は次のように説明される。第一に、1988年という時点で中国がまだ社会主義市場経済改革を全面的に展開していなかった状況下において、李小江は婦女問題の原因を資本主義的生産関係に帰するよりも、「従前の」経済体制が徐々に解体される過程で自然に生じた婦女地位の

「還元」現象にあると認識していた。第二に、より重要な点として、当時の李小江の理論的対話対象が依然として「過去の」マルクス主義婦女解放理論に置かれていたことが挙げられる。女性の「主体意識」を強調したのは、まさにこの「過去の」理論を批判的に乗り越えるためであった。李小江は『婦女解放の基準は一体何か』において、四つの「等しくない」を提唱している。すなわち「女性が社会進出することは婦女解放に等しくない」「階級解放は婦女解放に等しくない」「男女平等は婦女解放に等しくない」「生産力の発達 は婦女解放に等しくない」である³³。これらの四つの命題はそれぞれ、「過去の」マルクス主義婦女解放理論が堅持してきた「婦女解放」の測定基準を批判的に対象化したものであった。旧来の基準を問い直した後、女性の「主体意識の覚醒」と「物質文明の高度な発展を促進する」改革開放が、「婦女解放」の新たな条件として併置されるに至った。この新たな条件設定の下、当時の中国で高揚したマルクス主義人道主義の潮流と同期する形で、婦女解放の新基準は「人間の自由かつ全面的な発展」へと再定義された。これにより婦女解放の目標は、単に女性の社会生産領域への参入を促進することにとどまらず、高度な自覚をもって従来貶められてきた「卑賤な属性」を再評価し、社会文明的価値尺度によって抑圧されてきた人間性と人的生命の価値を回復させることへと転換した

李小江はここにおいて、1984年の二つの論文に見られた矛盾的な緊張関係を保持している。すなわち、過去の婦女解放理論に対する批判を展開しつつも、目的論的には依然として「男女平等」という時代的要請を継続させているのである。改革開放という歴史的条件下で生産関係が「還元」を通じて生産力と適合する状況が生じているにもかかわらず、彼女は人間の認識がこの種の「還元」に影響されないと主張し、女性が引き続き広範な社会参加を通じて社会的承認を追求するとの立場を堅持した。同時に、過去の社会主義的实践がもたらした女性の「二重負担」を問題視しながらも、現代女性が「勇敢に二重生産の職責を担い続けることが、私たちの世代の女性が解放へ向かう必然的段階である」と断言した³⁴。

このことから、「女性の主体意識覚醒」の提唱が、従来の社会主義的婦女解放実践が達成した両性の社会的権利の平等を放棄する意図ではなく、その成果の上に新たなジェンダー像を構築するための理論的展開であったことが窺える。この要請に応えるため、李小江は後に「婦女」の存在論的抽象化を源泉としつつも異なる「有性の人」という存在論的概念を提示することになる

3-1-3 「有性の人」

この概念が初めて提示されたのは、1989年1月に出版された『女人の出路』の最終章「婦女研究在中国」であり、これは李小江が1980年代を通じて取り組んできた婦女研究の10年間を総括するものである。冒頭において、李小江はこれまで一貫して展開してきた社会主義婦女解放への批判的視点を継承し、過去30年にわたる婦女解放が、両性の社会的権利が高度に平等化されたという前提のもとで「婦女」という存在の抽象を軽視してきたと

指摘するのである。

しかし、その影響について李小江は含みのある表現で次のように述べている。

「まさに中国の婦女は、他の西洋諸国の婦女よりも、より早く、より十分に男女平等の社会生活を体験したがゆえに、平等原則の下で女性が男性とは異なる甘苦を、より深く実感できるのである。³⁵⁾

李小江は「甘」と「苦」の矛盾構造において、現代中国における婦女研究の意義を提示した。「苦」の側面において、中国の婦女解放が「婦女」の抽象化を欠いたことによって影響が生じた以上、新時代の婦女研究は「平等」追求から派生した社会的な苦難を超克し、「婦女」の抽象化を完成させ、より深い文化的探求を遂行しなければならない。一方「甘」の側面では、新中国が両性の社会的権利における高度な平等を既に達成し、西洋の女権主義運動が追求する両性権利平等を凌駕しているがゆえに、新時代の婦女研究は男女平等主義を超え、女権主義の限界——「人」としての女性の権利への一面的追求——を乗り越え得ると主張した。

「甘と苦」の矛盾構造を通じて、彼女は革命による「人」を基盤とする社会的権利の平等を「婦女」への疎外として位置付けつつ、他方でこの疎外を「婦女」が西洋女権主義を超克する契機と捉えた。婦女研究の目的は「婦女」の自然的本質への回帰ではなく、社会的権利が高度に平等化された「婦女」を出発点とし、二者を共に超える新たな道を模索することにあつた。ここに李小江が問題を再び過去の社会主義婦女解放に対する批判的継承の場へと引き戻した理論的戦略が明示されている。

「有性の人」という概念は、まさにこの2つの「超越」を実現するために提唱された新たな視点であり、李小江はそれを独自の「人」論のなかに位置づける。

「人の基本的規定性は3つの面において現れる。すなわち、人は相対的に独立した生物個体であり、人は性を有しており、人は社会関係の産物である……この3つの規定性は相互に依存し合う……前者(生物個体)は人類存在の前提であり、自然に属する。後者(社会関係)は人類存在の本質属性であり、人間が自然を超克するところにある。そして中間に位置する“性”が、生物としての人間と社会としての人間を具体的に表す仲介役を担う」³⁶⁾

鄭威鵬が指摘するように、この記述には実際に三項的な弁証法構造——「人間の自然的属性—人間の性別—人間的社会的属性」——が呈示されている³⁷⁾。この構造において、「有性の人」は純粋な自然的属性でも社会的属性でもなく、両者の間に位置し、両者を媒介し包含する仲介項として存在する。したがって「有性の人」は本質的な属性を一切有しておらず、あくまで人間の自然的属性と社会的属性が相互に関係し合う外在的表現に過ぎない。李小江自身の言葉を借りれば、「生物学的個体として独立した人間は、常に特定の性別的身份を帯びて人類社会に存在する」。まさに「有性の人」の実質的内包が人間の自然的属性と社会的属性の動態的關係によって完全に規定されるがゆえに、李小江はこの視角が両

性を包摂する可能性を有し、さらには「人間の自由かつ全面的な発展」の必要条件となり得ると考えた。

「有性」の視角は、単純に「男性的」あるいは「女性的」いずれかに同化されるものではなく、本質的に両性を包含する対比的な観点である。したがってこの視角に立った考察は、「男性的」または「女権的」な現実目的に奉仕するものではなく、人間自身に対する包括的理解を深化させることに寄与する。これはまた人類が「自由かつ全面的な発展」を求める道程において不可避の段階である³⁸

こうして、社会主義的婦女解放の批判的継承を通じて、李小江は「有性の人」という概念構築において、哲学理論的抽象の次元で新たな存在論的構造を確立しようと試みた。李の見解によれば、人間の具体的な「性身份」には「自然」と「社会」という二大範疇が凝縮されているため、「有性の人」の視座から出発することが「範疇的人間」から「具体的人間」への還元を促すとされた。董麗敏が指摘するように、「有性の人」概念は単に「性」を有する「婦女」を発見するためではなく、より根本的には自由で全面的に発展する「人間」を指向し、性別権力の階層関係を超克する新たな社会秩序の構築を目指すものであり、これにより古典的マルクス主義における「人間」論との理論的共鳴を形成している。

3-1-4 「本源」に向き合った理論構築——マルクス主義婦女理論

以上のように、80年代の李小江における3つの主要な「用語構築」の歩みを振り返ると、この時期の彼女の問題意識は常に「過去」の社会主義婦女解放実践をめぐっていたことがわかる。「婦女」を独立の範疇として抽出し、「恩賜論」と「超前論」で「婦女解放」の基準に疑問を呈し、「有性の人」で「人」をさらに超克する——こうした一連の営みは、いかにも従来のマルクス主義婦女解放理論を批判する姿勢を表しており、中国における「女性主義」普及の先駆けのようにも映る。しかしながら、彼女はどの段階でも、社会主義婦女解放が成し遂げた最大の功績——男女の社会的権利の平等——を否定することはなかった。たとえそれが婦女にとって「二重の負担」をもたらすとしても、「男女平等」をやめようとする考えはついで抱かなかったのである。

他方で、西洋女性主義理論は、李小江が積極的に参照した外部理論資源であるにもかかわらず、常にマルクス主義婦女解放実践との緊張関係に置かれていた。つまり李小江はこれを歴史唯物論の認識論的枠組みに位置付け、「道具的」な応用に留めようとしたのである。これは西洋女性主義理論が李小江にとって可有可無な存在であることを意味しない。逆に、これらの理論資源が欠けていたならば、彼女の社会主義婦女解放への評価は立脚点を失っていただろう。同時代に李沢厚や劉再復ら新啓蒙主義思想家が包括的な「人間」の次元で「過去」を批判しようとした思潮においては、「性別」の位置はそもそも存在し得なかったからである。まさに同時代のフェミニズムが哲学レベルで「婦女」を抽象化したからこそ、「有性の人」という性別視角が生まれ、「性別」の視座から「人間」への問い直しが可能となった。

鄭威鵬は李小江の「有性の人」の三項的弁証法構造とボーヴォワールの実存主義倫理学を比較し、両者の「ジェンダー論理構造」が高度に同型的であることを指摘している³⁹。しかし1980年代全体を通じ、李小江の理論著作にはボーヴォワールや他の同時代西洋女性主義理論家への言及が一切存在せず、彼女が意図的にこれらの外来理論を不可視化したかのようである。西洋女性主義の「道具性」はこのような意識的な隠蔽に現れており、歴史唯物論の目的論的枠組みに回収することで、「未成熟な婦女理論」という評価枠内に統制された。それが「未成熟」である以上、当然「成熟した婦女理論」——すなわち「人間」を超克した「マルクス主義婦女理論」——に取って代わる正当性を有し得ないのである。

二つの理論体系の緊張関係は、李小江の1980年代における理論構築において最も核心的な位置を占めていた。言い換えれば、マルクス主義婦女解放の実践に対しては批判的継承を、西洋女性主義理論資源に対しては継承的批判を試みたのである。さらに李はこの緊張関係を建設的な方法で表現しようとし、これが「マルクス主義婦女理論／婦女研究」という学問分野構想を形成し、1989年に「有性の人」という形でその存在論的基盤を提示するに至った。この理論構築の野望が対等に向き合う唯一の対象は過去のマルクス主義婦女解放理論であり、当時の李小江は「女性主義理論」と「マルクス主義婦女理論」の潜在的競合関係を認識しつつも、依然としてそれらを「道具的」に制御し応用しようと試みていたのである。

1984年から1989年にかけて、李小江の視線は一貫して過去へ、本土へと向けられていたと言えるのである。その間、李小江自身は「婦女研究」をあえて「婦女研究運動」と名づけたり、その性質を「本土的」や「民間的」な範疇に位置づけたりすることはなかった。しかし、これまでの歩みがすでにその性質を証明する注釈となっており、さらに90年代に「社会性別（ジェンダー）」が中国に全面的に導入された歴史的進程と相まって、李小江がそれと対抗しようとした際の主要な歴史的資源を形成したのである。

3-2 第2期——1989～1993年「本土／民間」的な存在としての——婦女研究“運動”

前節の論述では、筆者が李小江に焦点を当て、1984年から1988年にかけての思想的系譜を整理した結果、あたかも李小江の思想が当時の「婦女研究」思想を代表するかのような印象を与えた。しかし実際、当時の李小江の主要な活動は個人著作の発表ではなく、「異なる立場・学術背景・性別の学者で構成される新たな学術領域」としての「婦女研究」の創設にあった⁴⁰。1985年、李小江は鄭州大学に「河南省未来研究会婦女学会」を設立し、同年に全国規模の婦女研究会議を初開催、鄭州大学で「婦女学」教育課程を開講、1987年には「鄭州大学婦女学研究センター」を設置した。2年間の準備期間を経て、1987年から1993年にかけて6年間、中国初の大規模婦女学術叢書「婦女研究叢書」の主編を務め、歴史学・「性学」・文学・法学・社会学・政治学等の学術分野を網羅し、多くの参加者が後に各分野の開拓者や主要学者となった。

これらの「婦女研究」参加学者たちは、多くの問題で李小江と見解を異にし、相互の論争も極めて激しかった。各参加者の個性のみを見れば、「婦女研究」は内在的な観点の統一性を有していない。これについて李小江も自覚しており、回顧録的著作において「婦女研究」参加学者たちの多様性を繰り返し強調している。1990年3月、李小江は「中国婦女の社会参加と発展」国際婦女学術会議を開催し、兩岸三地・海外各国の「婦女」研究者、河南省婦女連合会代表、政府官僚を含む計150名以上が参加した。この大会開催の意図は何か。李小江は明らかに「婦女研究」陣営内の問題を認識していた。一つは各学科間の分断、もう一つは研究者間の分断である。この分断状態は学者間の「多様性」を保持する反面、「高度に総合的な性質を持つ婦女学の発展に不利」であった⁴¹。

1990年から1991年にかけて、李小江は1980年代「婦女研究」の全体像を網羅する2冊の論文集——『華夏女性の謎』と『中国における婦女研究』——の主編を務めた。前者は「婦女研究叢書」参加学者の論文集、後者は複数の「婦女研究」参加学者の視点から各分野の「婦女学」発展状況を紹介し、海外学者による自国の「婦女学」状況説明を付録とした。両書において李小江は序文または総論を担当し、「婦女研究」成立の歴史的要因と将来展望を自身の視角から解説した。注目すべきは、両総論で李小江が採用した理論的視角が過去5年間の学術著作から継承され、依然として理論的対話対象を「マルクス主義婦女解放理論」に置き、「婦女研究」を「本土・民間」として統一的に位置付ける意図が存在しなかった点である。少なくとも1991年時点まで、李小江は1980年代の「婦女研究」に「運動」の名称を与え、「本土・民間」としての統一性を付与する意思を有していなかったと言える⁴²。

しかしながら3年後(この期間に単著は一冊も出版されていない)、李小江は1994年に香港青文書店より『女人に向かって——新時期婦女研究実録』を刊行し、個人の視角から1980年代から90年代初頭にかけての「婦女研究」の起因と経緯を詳細に暴露した。李小江は自らが「婦女研究」に携わった個人的な心の遍歴を出発点とし、1984年に『人類解放と婦女解放』を発表した後で婦連から受けた批判、1985年に鄭州大学で「婦女と家政」課程を開講した際に巻き起こった「逆行」論争、海外学者との間で交わされた中国の「婦女解放」が「女権運動」か「社会主義運動」に由来するかに関する議論、「八九学潮」後の活動空間の縮小と直面した政治的圧力、1992年の「ハーバード論争」での発言および海外中華婦女学会学者との衝突を記録している。その記録の核心は、李小江個人の心の軌跡を超えて、二つの緊張関係を軸に展開される。一つは「婦女研究」と婦女連合会の緊張と協力が交錯する関係、もう一つは中国の「婦女研究」と西洋(香港・台湾を含む)学者の「女権主義」との対立関係である。結語部において李小江は意味深長な表題——「一つの東洋女性の自省」——を掲げ、自らの「婦女研究」に対し文学的な告白を付した。

「東洋」という言葉は本来「西洋」との対照関係においてのみ存在し得る概念であり、「土着」が「外来」の映照の下で初めて自己を顕示するのと同様、両者は言語学的構造において高度な同一性を有する。まさにこの「東洋」の文脈において、李小江は自らが「再建」を完成させたと宣言する：

「私はすでに私の『再建』を完了した。私の信仰は女性に対する認識、中国に対する認識、東洋女性としての自己認識から生じる。ゆえに私は自信を持つが、決して自惚れはしない」

「再建」を経て、李小江は初めて「東洋と西洋」の対比関係を自らの婦女研究の視野内に置いたように見える。東洋と西洋の相互対照において、彼女はまず「西洋」が婦女及び人類にもたらした貢献に対し「感謝」を表明した：

「東洋女人として、私は西洋婦女に感謝する。西洋女権主義がなければ……20 世紀全世界の婦女の解放は存在しなかっただろう」

続いて「中国女人」として、李は中国社会主義革命に対しても「感謝」を述べた：

「マルクス主義がなければ……ここで『女人に向かって』の物語を語る一人の女人も決して存在しなかっただろう」

二つの「感謝」は李小江の自己定位を表しており、まさにこの感謝ゆえに、彼女は西洋女権主義とマルクス主義への恩義に報いるため「奉獻」が必要であると自覚した。いかにして「奉獻」するか。理の当然でありながら意外にも、李小江は「反省」こそがより良い「奉獻」につながると考えた。「何を反省するのか？」再び「八九学潮」後の時代精神に反するかのように、マルクス主義婦女解放理論に背いた時と同様、彼女はこう宣言した：

「私は決してこの土地（中国）に背を向け、西洋へ『文明を求め』に行くことはない」⁴³

この一文に潜むヒントは興味深い。1989 年 11 月、李小江は香港中文大学の国際会議に参加し、初めて「海外の学界」と本格的に接点を持った（前節でも触れたように、「八九学潮」の直後のことである）。台湾人の弁護士が「大陸には人権がないのだから、女権などあるはずがない」と糾弾し、それに対して李小江は「6 億もの婦女が生きている。人権も女権もなければ、彼女たちはどうやって生きてきたのか」と反発した⁴⁴。その後、1991 年 8 月から 1992 年 2 月にかけて彼女はヨーロッパ、北米、南米、アフリカなどを回って各種学術会議に出席し、ちょうどこの時期にソ連は解体し、「the next is China」という声が絶えなかった⁴⁵。1992 年 2 月のハーバード大学とウェルズリー大学が共催した国際学会「Engendering China: Women, Culture, and the State」で、「女権主義は中国の婦女解放には適合しない」という主張を打ち出し、論争を引き起こした（いわゆる「ハーバード騒動」）。1989 年から 1992 年までの 3 年間に「文明の地」で過ごしたうえで、なおも「西洋に文明を求めない」という結論を得たのである。

1994 年に出版された『女に向かって』において自らの「再建」を確立した後、李小江は 1995 年に新たな論文集『昨日に別れを告げる——新时期婦女運動回顧』を刊行した。本書において、李小江はまず「婦女研究」の歴史を改革開放という長い歴史の流れの中に位置づけている。「新时期」について、李小江は 1978 年の“三中全会”から鄧小平の南巡によって全面的な市場経済改革が始まる 1993 年までを指し示し、この背景のもとで「婦女研究」を 4 つの時期に区分している。それらは、「70 年代末から 80 年代初頭にかけての婦女問題誘発期」、「80 年代初頭から 80 年代中頃にかけての理論探索期」、「86 年から 89 年の運動のピ

ーク期」、「1990 年から 1993 年の強化と縦深的発展期」である⁴⁶。李小江自身が初めて婦女解放に関する論文を発表したのが 1983 年であり、かつ同分野での第一人者でもあることを考慮すれば、この年代区分には歴史を回顧的に構築する意図が内包されているといえよう。

李小江によるこのような構築を経て、「婦女研究」は「雑多」な多様性から徐々に切り離され、「婦女運動」という名称のもとで内部にある種の同質性を持ち、総体として把握し得る歴史的事実として位置づけられるようになったのである。

回想録的な性質をもつ本書は、1990 年から 1991 年にかけて刊行された 2 冊の論文集とは異なり、1985 年から 1989 年にかけて社会で生じた様々な「婦女問題」に対する李小江の分析や、当時「婦女研究叢書」に参加した研究者たちが自著を評価し、その執筆過程を回想する内容を収録している。また、当時社会で巻き起こった「男女平等」をめぐる議論と、それに対する李小江本人の応答も含まれている。さらに特筆すべきは、李小江がここで初めて「婦女研究」を「婦女(研究)運動」と改称し、その性質を「本土的／民間的」な婦女運動であると位置づけた点である。

新時期における婦女運動の理論的貢献を評するにあたり、李小江は三点の概括を行った。第一点は『『正統的』婦女解放理論』への疑問提示、第二点は「婦女」の抽象化達成であり、これら二点が依然として「マルクス主義婦女解放理論」を軸に展開されていることが窺える。しかし第三点において、彼女は次のように論評した：

「中国婦女解放の道程に対する再認識・評価と客観的歴史解釈が

……婦女運動の土着化を主流趨勢とする上で極めて重要な役割を果たした」⁴⁷

さらに比較の視野を中国大陸外の香港・台湾及び欧米・日本等に拡大し、「新時期(1978～1993 年)」の婦女運動が二つの方向からの「誘導と参考」に直面していることを強調した。一つは 1949 年以來の社会主義婦女解放伝統、もう一つは西洋 200 年にわたる女権主義伝統である。この二者択一の間で、李小江は婦女研究の「出路」問題を提起した：

「我々自身の『伝統』と西洋女権主義伝統の間で、我々はどこへ向かうべきか？」⁴⁸

「出路」に関して、彼女はまず婦女研究の二つの突破点を認めた。第一に伝統的『『婦女解放』の道程と理論』に対し歴史的事態に即した理論的解釈を提示した」こと、第二に「西洋女権主義理論」に対して多くの突破、特に「婦女と国家」の問題で独自の声を発したことである。しかしさらに進んで、李小江は「どこへ向かうか」という現実的焦燥から、婦女研究の未来が再検討を必要としていると指摘した：

「我々は過去に自身(中国婦女)の問題に過度に集中し、国際婦女運動との経験共有への自覚を欠いていた……世界各国と我々の経験を共有する責任がある」⁴⁹

これにより婦女研究の将来方向を「世界各国との経験共有」へと導いた。3 年間の遍歴を経

て、李小江は次第に視線を「過去」から「未来」へ移し、「本土性」を保持しつつ理論を「西洋」へ伝播させようとしたことが窺える。

他方、李小江は婦女研究運動の組織形態に着目し、新時期の婦女運動が明らかな「民間」的色彩を帯びていると分析した：

「婦女連合会が唯一の婦女組織であるという大一統的局面が終焉し、民間各階層の婦女が……異なる発展道路を選択する(たとえそれが誤りであっても)ことを可能にした」⁵⁰

この変化に対し、李小江は明らかに好意的評価を下している。これらの婦女組織の出現が空白を埋め、社会転換期に生じる各種婦女問題を緩和し、国家と社会の負担を軽減しつつ、婦女の実生活に積極的役割を果たすと認識したのである。

上述の「民間/本土」に関する二つの評述を総合し、李小江は「新時期」婦女運動の特性を「分離」と概括した：

「現実運動において、国家が婦女を塑造する伝統から分離し、西洋女権主義運動とも一定の距離を保つこと……一連の分離がなければ……新時期における相対的に独立した発展、民間性と本土化を主流とする婦女運動はあり得なかった」⁵¹

以上を総括すると、李小江はここで 1980 年代から 90 年代初頭にかけての「婦女研究」に対する総合評価を完成させた。改革開放「新時期」という長い歴史的過程に位置付けることで時代区分史的把握を遂げ、「婦女研究」に「婦女運動」の性質を付与したのである。「研究」から「運動」への変容過程において、「研究」が孕んでいた無目的性と内部不整合性が弱まり、全体としての「運動」は目的論的作用により「本土的/民間的」特性を獲得した。これによりその作用が総体的に「分離」として概括され得た。次節では、「本土的」と「民間的」という二つの側面の歴史的生成過程を個別に検証し、李小江が「本土的/民間的」を過去の「婦女研究」の根本性質として位置付けようとした意図を解明する。

3-2-1 鄭州国際学術会議からハーバード論争へ——「本土」的側面の形成

1989 年は、中国のみならず世界にとってきわめて特殊な年であった。中国はこの年、「価格闖関」の失敗でインフレが激化し、「八九学潮」や国際的封鎖という政治的危機に直面していた。一方、世界では東欧の旧社会主義国が相次いで体制転換に突入し、ほぼ同時期に共産党政権が崩壊、ソ連もゴルバチョフの改革で 2 年後の解体へ向かっていた。国際秩序が大きく再編されるさなか、中国国内の学術界は冷え込み、党内保守派によるいわゆる「清党」の動きなどで一気に空気が重苦しくなった。李小江にとって、この 1989～1992 年の 3 年間、「婦女研究」の主要な活動は大きく 2 種に分かれる。すなわち海外の学術会議や交流への参加、および国内各地での実地調査である。李小江の「本土」意識は、まさに内と外の交流のなかで徐々に明確化していったと言える。

1984年から1989年までの5年間で、李小江が開拓した婦女研究はほぼゼロからスタートし、各大学に婦女研究センターができるなど一定の学科体制が整った。意外なことに、この間、海外の女性主義研究者はすでに李小江の名をかなり注目していたが、李小江自身が実際に中国大陸外の会議に出席したのは1989年11月、香港中文大学の「Chinese Gender Study in Chinese Society」が初めてであったようだ。筆者の知る限り、ここで李小江は初めて海外の学者から直接質問され、それに答える形で自分の見解を示している。そのやりとりは前節でも触れた通りであり、台湾の弁護士が「大陸に人権などないから女権などありえない」と言い放ち、李小江は「中国大陸には5億もの婦女が暮らしている。もし人権も女権もないなら、彼女たちはどうやって生き延びてきたのか」と反論した。興味深いのは、ここで注目すべきは、李小江が反駁に用いた理由である。李は中国の婦女に「人権／女権」があるか否かという理論的な視点から反駁するのではなく、「中国の五億にも上る婦女の歴史とその存在自体……が、いかなる政治よりも上位にある」と考え、「中国婦女」を「人権／女権」の理論(政治)範疇から独立させようと試みるのである。

李小江は次のように意味深い言葉で述べている。

「女人のいかなる人権をも切り捨て、中国女人のいかなる女権をも切り捨てるのならば、私は理解できないし、興味もないのである。」⁵²

マルクス主義婦女解放理論を踏まえ、「婦女」に対する存在論的抽象を追究してきた李小江であるが、ここでは「中国女人」に対して「人権／女権」の抽象を行うことに反対するのである。李小江自身が「有性人」という概念を用いることで、「婦女研究」に対して哲学的次元での存在論的抽象を試みていることを考慮すれば、李小江は「理論」にまったく興味がなく、ただ「実践」に集中している人物だと断じることはできない。では、なぜここで李小江は「人権／女権」に回撃を加えるのか。

その動機は、これはまさにこれらの概念が無批判的に流用された結果、「中国女人」の現実に対する無視が生じたことにはかならない。そして「中国女人」という概念において、「中国」と「女性」は二つの範疇に分解可能であり、この分節化が李小江の持続的問題意識を相当程度構成してきたのである。

3-2-1-1 「本土」を見据えた「婦女」と脈絡

1989年の香港での会議を「初の海外進出」とするなら、1990年3月に李小江が鄭州大学で主催した国際婦女学術会議(以下「鄭州会議」)は、こんどは「ホスト側」として海外研究者と向き合う場であった。この会議の影響については、李小江が『走向女人』で3回言及している。章題で言えば「女界大会師」「わたしだって敏感」「マルクスの『帽子』」というところである。「女界大会師」では「八九学潮」の余波で開催が危ぶまれた点や参加者の状況を、「わたしだって敏感」「マルクスの『帽子』」では海外研究者と国内研究者のやりとりについて述べ

ている。前者にはこんなエピソードがある。あるドイツ人研究者が「少数民族女性の売春」問題を指摘したところ、母系社会として知られるナシ族を研究する嚴汝嫻教授が「西洋のやり方はここでは通じない」と強く反発し、ドイツの研究者は「彼女たち(中国研究者)は敏感すぎる」と首をかしげた、というやりとりである。李小江はこれを「わたしだって敏感」という章で解説し、

「二つの文化、二つの民族がある。一方は誰もが『天国』と称える…他方は低い地点にあるが、決して何もかも劣るとは思っていない。その立場にいる人からすれば、たとえ事実であっても短所をあれこれ数え立てられるとどう感じるだろうか」

ここでいう「天国」は「西方」を、そして「低いところにありながらも、自分を一無是処(何の価値もない)とは思わない」側は「東方」を指している。李小江はたとえ話を用いて、中国の研究者の「敏感さ」が生じる理由を明示している。すなわち、「婦女解放」の伝統を有する「低谷(低いところ)」として、西側の価値観を無条件に受け入れることへの本能的な抵抗が「敏感さ」として表れるというわけである。これを踏まえ、李小江は東西間の差異がもたらし得る影響を次のようにまとめている。

「東西の文化には確かに巨大な相違が存在する……それは一見わずかな違いのようでありながら、私たちの重要な意思決定に影響を及ぼし得るのである。」⁵³

では、どのような「重要な意思決定」が影響を受けるのか。李小江はすでに意識していた。80年代の中国における「婦女研究」は、「社会主義婦女解放」がもたらした“平等のあと”の問題——すなわち、いったん実現された「平等」の価値をどのように再評価するかという課題に応えるものであった。一方で、この時期の西洋における「性別研究(ジェンダー研究)」は、いまだ根強い「男女の本質的差異」への批判を通じて「性別」の本質的な「平等」を立証しようとする意図をもっていた。すなわち中国側が「平等からの脱却(去平等)」を目指しているのに対し、西側は「平等の再確立(再平等)」を志向しているのであり、そこには方向性の違いという重大な意思決定上の差異が存在する。こうした相違に直面するなかで、李小江は互いの国々の社会背景を理解する前提のもとで——すなわち「求同存異(共通点を求めつつ相違を認める)」を図るよう期待しているのである。

ドイツの教授との対話によって、「東方」と「西方」の関係性をいかに築くかを反省した李小江は、同じく香港・台湾など華人社会の学者との交流を通じて、「マルクス主義」の根づきもたらした中国の問題意識の「独自性」をあらためて確証するに至った。会議終了後、李小江は数名の台湾研究者を伴い河南省歴史博物館を見学した。その場で李小江は、典型的な歴史唯物論の方式を用いて、中国社会の歴史的形成過程——母系社会から父権社会への移行——を説明した。すると台湾の研究者は次のように感慨を示したという。

「あなたがたの歴史には本当に母系社会があったと認め、そのうえ階級社会こそが父権社会であると公然と認めるなんて……婦女解放の最も説得力ある歴史的根拠を提供しているわけですね。」⁵⁴

同じ華人でありながら、これほどまでに異なる歴史観をもつことに李小江は驚くと同時に、この違いこそが中国大陆におけるマルクス主義の普及によって生まれたものだとは認識したのである。

「私たち大陸中国で育った同世代の女性も男性も、こうした歴史観——母系社会は原始共產主義であり、父権社会は階級社会の始まりである——を正史として受け入れてきたのである。」

マルクス主義が中国の「婦女解放」の過程において及ぼしてきた深遠な社会的影響を改めて認識した李小江は、改革開放初期からすでに「マルクス主義婦女解放」の歴史を整理してきた研究者として、「新時期」の「婦女研究」はマルクス主義の整理から始めるしかないと提唱する。

「私たちは自らを整理することからしか始められない。私たちの教訓と経験の中から栄養を汲み取るしかない……マルクス主義は『帽子』などではなく、私たちがかつて生きてきた生活の痕跡そのものなのである。」⁵⁵

台湾の研究者との交流を通じて、李小江は「マルクス主義」こそが「婦女解放」の根源であるという自らの見解をさらに確信し、その徹底的な揚棄を通じてこそ今後の「婦女研究」を展開し得ると考えたのである。

鄭州会議終了後、李小江はマルクス主義婦女理論の理論的研究を継続しなかった。むしろ、1990年9月以降、机上の研究を放棄し、「20世紀婦女口述史」のフィールド調査に研究の重心を移した(唐凌の手紙による)。この一見すると大きな転換は、彼女の研究が歴史哲学的な理論追究から歴史人類学的研究へとシフトしたことを示唆している。すなわち、研究方法も思弁的なものから実証的なものへと変容したのである。

この転換が生じた背景を理解するためには、まず1988年に李小江が社会主義婦女解放の歴史進程をめぐって示した「恩賜論」という判断に立ち返る必要がある。「恩賜論」によれば、中国における婦女解放は、女性の主体意識がまだ十分に目覚めていない段階で社会主義革命によって受動的に“与えられた”ものであるとされる。この判断は「革命主体」という論争的なテーマに直接関わるにもかかわらず、李小江はここで実証的な証拠を提示せず、また「超前論」と比べても、マルクス主義の経済決定論的な理論を利用していないのである。同年、李小江が偶然に劉沙(陸軍上将・呂正操の妻)と対話した際、劉は日中戦争から解放戦争期にかけての自らの経験、すなわち「同じく銃弾の飛び交う戦場をくぐり抜けた」こと(白露との対話)を語った。李小江は後に、この対話によって「局部的経験」にあらためて着目し、「局部の異質性」に直面する際の定性的研究は慎重でなければならない、さもなければ「認識上の誤った判断を生むかもしれない」ことに気づいたと回想している⁵⁶。まさにこの気づきこそが、李小江に「恩賜論」を再評価させる契機となったのである。つまり、この論が「局部的経験」を無視した拙速な判断ではないかという疑念である。そして、こうした拙速な判断は「無数の女性たちが自由と解放を求めて払ってきた犠牲と努力」を覆い隠してしまう可能

性があると考えに至った。

「局部的経験」への着目によって、李小江は、それまで理論的抽象を基盤として行ってきた社会主義婦女解放史の総括が、歴史の実態を歪めるおそれがあることを悟った。李小江の視点によれば、口述史研究こそが「理論的抽象によってもたらされる『無情』の欠落」を補う方法なのである。こうして以後二十年余りにわたり、李小江は「婦女研究」の領域で、ほぼすべての精力を「20 世紀婦女口述史」の資料収集と整理に注ぎ込み、それを婦女研究の「礎となる作業」と見なすようになった。

国内での「婦女口述史」フィールド調査と同時に、1991 年から 1992 年にかけて、李小江は海外での学術交流にも多くの時間を割いた。1992 年 2 月にハーバード大学とウェルズリー大学が共催した“Engendering China: Women, Culture, and the State”の学術会議記録、ならびにその期間中に李小江が蘇紹智と行った対話および書簡でのやり取りは、この時期の李小江が持っていた「本土」意識を理解するうえで貴重な手がかりを与えてくれる。

1992 年 2 月 7 日、李小江は会議で次のように発言している。

「このテーマは、中国の婦女解放の道が西欧の婦女とは異なることを明確に示すためのものである……女権主義は西欧の産業文明の産物であり、単純にそれを中国やその他の非産業文明社会の婦女解放運動に当てはめるわけにはいかない……」⁵⁷

この発言で李小江は、80 年代の婦女研究で用いられていた「婦女解放」と「女権主義」を区別する枠組みを継承し、両者の必然的な結びつきを断ち切ろうと試みている。さらには「女権主義」を相対化・歴史化し、実践面での普遍性を否定しているのである。そのため、発言の締めくくりで李小江は次の 3 点を要旨としてまとめる。

1. いかなる理論概念も歴史的産物であり、したがって必然的に局限性をもつ。
2. 「西欧の」女権主義を強調するのは、女権主義が最初に産業化を遂げた西欧社会から生まれたものであるという事実による。……しかし非産業化社会では、女権主義が主流になったことは一度もない。
3. 女権主義は(他の)国家において、旗印ですらなかったし、ましてや目標でもなかった……ゆえに彼女たちを解放する力とはなり得なかった。⁵⁸

こうした発言を李小江は後に回想し、「女権主義の本拠地で女権主義に反対するなんて——それは死ぬ気か！」⁵⁹と振り返っている。しかし、この一連の発言からは、李小江にとっての「本土」思想の核心がうかがえる。すなわち、「女権主義」という概念に囚われず、その固定化された中身が各国の「婦女解放」の実際と適合するかどうかを絶えず吟味しようとする態度である。これは鄧小平の「实事求是」と構造的に高度に似通っている。

李小江の発言は三種類の反応を呼び起こした。第一はメキシコをはじめとする第三世界の研究者たちの賛同の声、第二は一部の西欧研究者たちの「なるほど、よく考えてみる必要がある」といった声、そして第三は海外に留学中の中国人学生たちによる直接的な反駁であ

る。

とりわけ、この第三の声こそが、その後「社会性別」(ジェンダー)が中国に導入される際に重要な推進力となった。当日の会議終了後、「海外中華婦女学会」の創始者の一人であった鮑曉嵐(当時は博士課程在籍)が李小江との対話を申し出た。しかし、この対話は順調には進まなかった。鮑らは女権主義が「gender」へと転換する過程を通じてその普遍性を証立しようとしたが、李はこの女権主義が西欧社会という歴史的な文脈を背後にしている以上、中国で実際に展開されてきた「婦女研究」とは合致しないと主張し、両者は平行線のまま決裂したのである。だが、この物語はここで終わらない。当時、この会議に招かれていた中国本土の研究者は李小江、朱虹、杜芳琴など八名がいたが、「海外中華婦女学会」のメンバーは李との対話が不調に終わったのち、杜芳琴と協力関係を結ぶことになった。翌年 1993 年、杜芳琴が勤務する天津師範大学で「社会性別」学術シンポジウムが開催され、中国における「社会性別」研究の幕が正式に開かれた⁶⁰。

以上の経緯を総合すれば、1989 年から 1992 年まで、李小江の「婦女研究」における「本土」意識は、海外研究者との交流を通じて次第に確立されたといえる。しかし、その根本的な契機としては、1988 年の劉沙との対話が挙げられる。これによって李小江は 80 年代を通じて行ってきた研究を再度見直し、「理論研究」から「口述史」への転換を引き起こしたのである。まさにこの時期、李小江が各地方で積極的に展開した調査研究は、彼女が単なる「中国」の抽象的視点にとどまらず、よりナショナリズム色の少ない、実証的研究の内実を伴う「本土」という呼称を用いて、その「本土」を最も基盤的な学術的アンカーとしつつ、対外的な交流を図るきっかけとなったのである。

3-2-1-2 「本土」を見据えた「中国」脈絡

ここで、李小江のこの時期における「女権主義」への批判的視座から生まれた「本土」意識を検討する際、第一には、80 年代の理論研究において「女権主義理論」を「マルクス主義婦女理論の萌芽的理論」枠に抑え込もうとした継続的な試みに、その連続性を見ることができる。しかし第二には、「八九学潮」後の社会環境の激変と、当時すでに 1 年近い海外滞在を経験していた李小江が学んだ視野の拡張とが相まって、李小江はもはや「婦女研究」のみに足をとどめず、「中国研究」という視点からあらためて「本土」の意義を問い直すに至ったのである。

1992 年のハーバード会議期間中(1992 年)、李小江は党内改革派マルクス主義理論家であり、かつ李小江が 1983 年に発表した論文「人類の進歩と婦女解放」が掲載された雑誌の編集責任者でもあった蘇紹智と 2 回にわたって長時間対話を行った。そして同年 5 月と翌年 3 月に、李小江は彼に 2 通の手紙を送り、「中国」という問題をめぐる議論を続けた。最初の手紙では、李小江は海外留学の経験を踏まえ、当時の海外「中国研究」の二つの潮流を批判し、それらが二つの陥穽に陥っていると指摘している。

「一つは『概念』……『民主』『平等』などの価値尺度と見做される概念が、多くは本土化された歴史的検証を経ずに中国本土研究へ適用されていること……『概念』のシニフィアンと中国現実の乖離が、正しい論理推論を却って誤った判断へ導く結果を招く。第二に『体系』の問題である。歴史的転換の過程において社会変化が常軌を逸する場合、『体系』そのものが制約となる……もはや中国をいかなる理論体系の中に位置付けるべきではなく、逆に『体系』を中国歴史変遷の過程に位置付けなければならない」⁶¹

「概念」への批判において李小江は、当時の海外中国研究が特定の「用語」に依拠しすぎて、中国の現実との差異を顧みずに論理推論を進めているため、中国社会を的確に捉えることに失敗していると考えていた。また「体系」への批判として、李小江は中国をグローバルな「体系」全体が大きく変革する文脈に置き、歴史的転換のまっただ中ではあらゆる既存の「体系」を再評価する必要があるものであり、中国をそのままある枠組みに当てはめることはできないと主張する。いずれの帰結も「中国の現実」への注目を促すものである。そこで李小江は、「八九学潮」後に海外へ移った中国人知識人や当時の海外中国研究界の状況について、次のように評している。

「彼らは感情の上ではあの土地(中国)を深く愛しているのに、理性の上ではあの土地で生きる人々を無意識のうちに切り捨ててしまっている。」

李小江によれば、当時の海外研究者の視野は狭く、「西風が東風を圧倒する」学術潮流と歩調を合わせて、政治的民主化への過剰な関心が寄せられ、中国が変革の只中で抱える「現実」に対する視察や考察が不足しているというのである。李小江はこれを踏まえ、1991年にカリフォルニア大学バークレー校で行った発表「公共空間の創造」を引き合いに、自らが考える研究者の学術的志向について述べている。

「政府や権力機関の動きを注視することも必要である……しかしながら、もう一方の目は下に向かわねばならない。すなわち社会、そして大衆へ向くのである。」

これが意味するのは、李小江にとっての「中国」(「本土」)とは、特定の社会政治制度やイデオロギーへの関心にとどまるのではなく、むしろ「大衆」への関心、さらには「社会の大衆の意志と要求」への注視を意味しているということである。この二方面への関心こそが、李小江のその後の学術的立場と研究方法を形づくっていく。学術的立場としては「本土／民間」の二重定位を堅持し、研究方法としては実地調査に基づく口述史研究を重視し、「大衆」の中に深く入り込もうとするのである。

翌年の手紙において、李はさらに「中国とは何であるべきか？」という問題を論じ、ハーバード大学での発言内容を継承しつつ、「価値判断」を超えた視座から「中国の現実」を研究することを試みる。そして前の手紙で示した「大衆」観を拡張し、「中国の生存」という価値の文脈に位置づけて論じ、そこから中国における「集権」体制の必要性をさらに論証する。李小江の「大衆」観を深く検討することは、彼女の「本土」的立場の実質を理解するうえできわめて重要である。この書簡の中で李はまず、中国を理解する前提を述べている。

「中国は客観的に存在している……中国を認識するには、まずそれを独立した意志と人格をもつ主体としてみなし、そして尊重することが不可欠である……ちょうど私たちが尊厳ある一人ひとりの人間を尊重するように。」

「想像の共同体」とは異なり、李小江にとっての中国は「人間」として具象化され、揺るぎない客観的実在と化している。よって分解や解体を容認する余地はない。ゆえに彼女はこう強調する。

「中国を理解するには、あらゆる先験的な価値規定を排除して、まっすぐに中国へと入っていくしかない。」

ここで李小江は再び、「理論」が「中国の現実」を踏みにじることを許さないという姿勢を示し、それを基盤に「中国の生存」を究極の目的と位置づける。生存を最高の目標とする立場から、李小江は近代の中国史の歩みを説明する。

「まずは民族の生存……中国人の民族意識には深く根差した世界意識があり、かつて中国が“ひとつの世界”として歴史的に存在したことが原因である。ゆえにそれは複合体であり、その内部は開放的であるが、外からの侵食に直面すると……閉ざされるのである。」

「次に大衆の生存……中国人の生存意識の核心は『共に生きる(共存)』であって、『自分だけが生き残る(自存)』ことではない。それは家族制度や村落を基盤とした社会構造に深く根づいている……『誰もが食べるものを得る』や『共同富裕の道を歩む』という(共産党の)スローガンが……正しいとされるのは……それが中国社会の生存意識と結びついた民意・民心に合致するからである。」

こうした「多様な民族」と「大衆」の「生存」の要請のもと、民族的危機と飢餓・貧困という二重の圧力にさらされてきた歴史を踏まえ、李小江は共産党の勝利と建国後の「集権」は必然であり妥当だったと考える。そのうえでさらに、「生存」を基盤とする中国の「出路(将来の方向性)」を論じる。

「二本の足で歩く……生存構造の面から中国を改造するのである。」

この「二本の足で歩く」とは、政治と経済の改革を同時に進めることを意味する。毛沢東の言葉にもあるように、鄧小平が1992年に最終的に打ち出した改革開放戦略を直接想起させる。この経済・政治両面での改革によって、生存構造を変革することが現在の中国の「生存」問題を解決し、ひいては「民主」への道を切り開く前提だというわけである。改革開放以降に起こった多くの変化を総括し、李小江は中国の希望とは、自らの独立した意志によって窮地を脱し、独自の方法で世界へと歩み出すことであり、「一元化」する世界に新たな視座を提示することであると考え。1993年当時の時代背景を合わせ考えるならば、ここでいう「一元化」は、中国学界における「西風が東風を圧倒する」という状況だけでなく、レーガン改革に端を発する「新自由主義」的な政治経済改革の潮流をも指し示している。李小江にとって、改革開放の意味とは、「中国」の生存問題を解決すると同時に、世界に対して独自の声を示

すことであり、世界の「一元化」に対抗するための潜在的資源になるということである。

以上の考察から明らかなように、李小江の「本土」意識は「八九学潮」後の中国研究学界の影響も大きく受けている。「本土」へのこだわりが彼女をして、当時学界で流行していた「概念／体系」先行の研究方法を再考させ、「中国の『生存』」を問題の核心と見なすに至らしめたのである。もし李沢厚の「吃饭(食べる)哲学」を念頭に置けば、李小江がそこから相当な影響を受けた可能性は十分に考えられる。その後、「生存」という視座を通じて李小江は「民族」と「大衆」への強い共感を獲得し、それによって学術的立場としての「本土／民間」の定位はさらに強化されたのである。「婦女」という脈絡と「中国」という脈絡が合流し、1989年から1993年にかけての李小江の「本土」論を形づくる理論的資源となったのである。

3-2-2 「資産階級自由化」——「民間」を見据えた形成

「資産階級自由化」という言葉は、改革開放から40年経った今日から振り返れば、もはや現実味の薄い表現かもしれない。しかしながら、1983年当時、中国の改革開放路線はまだ完全には固まっておらず、党内の「改革派」と「保守派」との闘争が依然として激しかった。この、現在から見れば荒唐無稽に思われる非難の言葉は、当時の政治的プレッシャーとともに厳然と存在していたのである。李小江にとって、この批判は1983年の『人類の進歩と婦女解放』発表時から1995年の北京・第4回世界婦女大会に至るまで、一貫して政府や婦聯高層からの圧力を象徴する言葉であり、今日でもしばしば「リベラリズム女権主義者」などの好ましからぬレッテルとして論文や書籍に現れる。

しかし1989年以前、こうした批判は時に李小江個人に困惑をもたらしたものの、「婦女研究」に対して実質的な悪影響を及ぼすほどではなかった。李小江の回想によれば、それには主に二つの理由がある。一つ目は当時、文化大革命が終わったばかりで、党の方針として「安定と団結」が重視されており、大々的な批判ブームを仕掛けることは抑制されていたことである。二つ目として、マルクス主義の観点からすれば「婦女」問題は無条件で“解放”されるべきものであると考えられていたため、イデオロギー一面での制約が比較的緩やかであったことである。実際、李小江が初めて論文を発表したのは『マルクス主義研究』であり、これが婦聯高層(通称「大姐」)から「反マルクス主義的」と非難されたにもかかわらず、その後の研究発表に実質的な支障は生じなかった。例えば、1984年に鄭州大学で「女子家政班」を開設し、当時の職業婦女が直面していた「二重負担」問題を軽減しようとした際には、婦聯高層が内部会議を開いて「李小江は婦女を家に戻そうとしている。歴史を逆行させるのか」と批判したが、それでも李小江による関連の「婦女教育」は継続して行われたのである。

このように、80年代を通じて李小江は「婦女研究」の「民間」的性質を特に強調したわけではなく、むしろ「知識婦女」というレッテルを重視し、紛争に巻き込まれることを回避する態度を取っていた。彼女自身は当時の批判をわりと寛容にとらえていた。

「理論上の『抽象』は必然的に実践上の『乖離』をもたらす——この点については、体制内の女性たちのほうが私よりも早く、しかも明確に認識していた。だからこそ彼女たちは私に対して『党の婦女解放路線から乖離しようとしている』『独立した資産階級の女権運動をやろうとしている』と批判したわけで、そうした主張にも一理はあるのだ。」⁶²

しかしこれとは裏腹に、李小江の「婦女研究」は政府関係者（中には婦聯関係者も多かった）から手厚い支援を受けていた。たとえば、80年代に「批判」を集めた多くの李小江の論文は婦聯の機関誌『中国婦女』や『中国婦女報』などに掲載されており、当然ながらこれらの雑誌の編集者がリスクを背負っていた。また、「女子家政班」をはじめとする「婦女教育」は、まさに婦聯幹部養成校の後押しによって成功に拡大した。さらに李小江が80年代末から取り組み始めた地方婦女の人類学的調査、文物収集、婦女口述史研究なども、各地の婦聯幹部の協力なしには実現しえなかった⁶³（『中国個案』p.172）。

このように、李小江と婦聯との関係は張力を含みつつも、80～90年代を通じて継続していた。この張力関係自体が、李小江の「民間」面向の重要な一部を形成し、単独で切り離して論じることはできない。以下では、1989年から1993年の間における李小江と婦聯の動態を検討し、李小江にとっての「民間」面向が内包する意味を探っていく。

3-2-2-1 「八九学潮」と「鄭州会議」——均衡の崩壊

しかし、李小江と婦聯との微妙なバランスは、ついに崩壊する。「八九学潮」後、改革開放路線の行方は再び不透明となり、学界の空気も一変して沈滞と緊張に包まれた。李小江による再述によれば、婦聯の権威的地位にある人物が1989年12月25日付の『中国婦女報』で名指しこそしないものの、次のような論調で彼女を批判している。

「近ごろは国際的大気候や国内の小気候の影響により、わが婦女解放事業の陣地も空白ではありえない……例えばある論文には、この60年間にわたる党の指導のもとで積み重ねてきた婦女運動の輝かしい成果を無視し、広範な婦女群衆の覚悟を貶め、革命と建設、そして自身の解放のために戦ってきた歴史を抹殺し、『婦女は依頼層である』とか、『中国の婦女解放は恩賜されたものであり、超前的である』などと述べるものがある……その一方で、わが国では既に行き詰まりが証明されたブルジョワの女権主義を称揚している……同志たちよ、中国婦女解放というこの園地は、わが党が切り拓いてきた社会主義陣地である……資産階級自由化思想による侵食をけって許してはならない。」⁶⁴

この文章は明らかに、李小江が80年代に唱えた「超前論」や「恩賜論」を標的とし、「婦女研究」を「資産階級女権主義」と見なしたうえで、最終的には李の研究潮流を「資産階級自由化思想」と断じている。しかもこれは「六四事件」後という敏感な時期に発表されているため、たとえ具体的な処分に踏み切らなかったとしても、そのインパクトは非常に大きかったといえる。李小江によれば、この批判は従来のものと異なり、自身の研究だけでなく、80年代以来

の「婦女研究」全体の発展に悪影響を及ぼす可能性があったため、彼女は初めて「逃げずに対抗する」姿勢を示した。彼女は4日後に「公開状」、『堅持馬克思主義的科学学風』を書き、正面から論争に応じる姿勢をとったという。この「公開状」は結局公表されなかったが、その後の展開を見るかぎり、婦聯高層の激しい反発を買ったと推測される。そこへ追い打ちをかけるように、ちょうど李小江が1990年に「鄭州国際婦女学会議」を開催しようとしていたところ、婦聯は政治的権限を行使して会議を阻止しようと試みた。しかし実際には会議は予定通り開催にこぎつける。その理由については、李小江が開会式で述べた言葉からある程度推測できる。

「とりわけ感謝を申し上げたいのは、河南省婦聯主任の楊碧如同志である……彼女が今回の会議に対して行ってくれた無私の、そしてきわめて貴重な政治的支援がなければ、この会議を円滑に開催することは難しかったであろう。」⁶⁵

明らかに、今回もまた婦聯が政治的支援を李小江に提供した結果、鄭州会議の円満な開催が実現したのである。具体的な交渉内容の詳細は不明ながら、ここに一つの興味深い分断が観測される。すなわち「婦聯」内部における分断——中央組織と地方組織の齟齬である。婦聯中央が「婦女研究」に対して抑圧的姿勢を取っていたのとは対照的に、李小江に地理的・政治的に最も近接し、直接的影響力を有する地方婦聯組織は、全国婦聯と異なる意見を保持し、比較的独立した意思決定権を行使していた。この意味において、李小江の「民間」的側面を単純に政府との「対抗関係」と解釈するのは適切ではなく、むしろ中央権力機構と地方権力機構の相互関係の中に自らの位置を定位しようとする政治的営為として理解すべきである。この選択は、当時中国の都市人口が依然として「ダンウェイ(単位)体制下」に生活していた社会的背景と符合する。実際、李が政治的権力との「対抗」を自ら選択したり、積極的に求める可能性は皆無であった。逆説的に言えば、李小江の「婦女研究」はまさに婦聯をはじめとする政府関連機関の強力な支援下において展開が可能となったのである。

3-2-2-2 「事をなす」ことと「鄭州大学国際聯誼女子学院」——体制内の NGO

李小江が代表する「民間」婦女研究と地方婦聯の協働形態を理解するためには、改革開放後に国内で興った各種学会・協会の形成経路が重要な参照枠組みとなる。改革開放初期、政府は「社会組織機構」の登録審査手続きを緩和した。これらの組織は学会や業界団体の名目で結成され、単一の「単位(ダンウェイ)」の制約を超えた広域的なネットワーク構築を可能としたが、政治的正当性を担保する「掛け持ち(グアカオ)先国家機関」の存在が必須条件であった。

この制度的環境下で、個人の発案に業界関係者が呼応し、政府機関が時流に沿って政治的支持を与えるという三重構造により、多数の「組織」が創出されることとなった。李小江が1985年に設立した「婦女学会」(婦女研究中心の前身)は、大学院時代の同窓で河南省未来研究会(以下、未来研)責任者であった巫継学の支援を得て、未来研傘下の公印を取得

することで活動基盤を確立した⁶⁶。1987年の「鄭州大学婦女学研究センター」設立申請においても、鄭州大学党委員会の承認が不可欠であった。

ただし留意すべきは、政府の支援が「政治的保証」以外の物的・財政的支援を伴わない点である。換言すれば、社会組織の持続的運営は組織者の自主的活動に依存せざるを得ない。この「掛け持ち」制度は組織運営に両義的影響を及ぼした。「利」は、保証機関が被傘下組織の完全統制を要求せず、相対的独立性を維持しつつ社会的信用を享受できる点に存する。「弊」は、保証機関の政治的威信を損なう活動が行われた場合、即時に「掛け持ち」資格を剥奪され政治的正当性を喪失するリスクが常時存在する点にある。

1980～90年代の婦女研究は、まさにこの「一利一害」の相互作用の中で漸進的發展を遂げた。時間軸で言えば、1995年の第四回世界女性会議開催前年の1993年まで、李小江主導の婦女研究は「掛け持ち」制度の利点を最大限に活用しつつ弊害を回避する戦略的運用に成功していた。換言すれば、政府機関との「掛け持ち」関係という制度的枠組そのものが、婦女研究運動の「民間」性を可視化する媒体として機能したのである。

「掛け持ち(グアカオ)」制度がもたらす「利」を最大限に活用する方法について、李小江が示した答えは「事を成す(做事情)」という実践哲学であった。1991年カリフォルニア大学バークレー校での講演「公共空間の創造」において、彼女は改革開放後の婦女研究が急速に發展した要因を初めて明らかにしている：

*「我々の目的は単純で、『対抗関係(分庭抗礼)』を構築するような政治的意図はなかった。ただ事を成すこと——婦女を動員し組織化し、自らのために、そして社会と家庭のために行動することだ。この『事を成す』基盤においてこそ、社会(男性を含む)や政府(婦聯を含む)と広範な協力関係を築くことが可能になった」*⁶⁷

ここで「事を成す」は「対抗関係」と対置され、婦女研究組織の方法論として確立される。李小江は「事を成す」実践こそが多様な社会勢力との協働を可能にする基盤であると主張した。具体的な協働方法に関して、彼女は二つの核心的知見を提示している。

第一に「社会のために事を成す」：

「公共的事業は多様な主体の参加が不可欠だ。私は常に形式・性別・能力・職位を問わず、可能な限り広範な人材を招集し組織してきた。適任者を見出せば直ちに組織運営を委ねる」

この時期の婦女組織には、明確な綱領・組織構造・業務分担・資金基盤といった成熟組織の要件が欠如しており、政府と「対抗関係」を構築し得る政治的主体とは言い難い。むしろ類似目標を持つ個人が緩やかに連帯する自律的ネットワークとして機能していた。この「高度に脱政治化された」組織形態は、体制外研究者のみならず婦聯や政府機関職員をも惹きつけ、政治的な懸念なく活動を展開することを可能にした。「脱政治化された社会組織」こそが、李小江的「民間」団体を理解する鍵概念である。

第二に、ゆるやかな組織が大きくブレないようにするために、李小江は「私自身のこと」を重視する：

「私自身の研究——思考・調査・執筆——は『群衆動員』戦略によって共同事業へと昇華した。組織メンバーは実務を担い、私の研究を『我々の共同事業』と認識するようになった」⁶⁹

組織の緩やかな結合を維持するため、李小江は自身の学術研究を「凝結核」として活用した。政治イデオロギーに代わり、学問的営為が組織の結束力を担保するメカニズムを構築したのである。

この二つの「事を成す」実践を通じて、李小江的「民間」組織の特異性が浮かび上がる。それは資本主義社会の「国家-市民社会」二元論的「民間」ではなく、社会主義改革下における「政府-社会組織」の有機的交錯関係である。政府は社会組織を活用して新たな社会領域を開拓し、社会組織は政府の信用を梃子に活動を展開する。「掛け持ち」制度はこの関係を媒介する政治装置として、支援と制約の両義性を帯びて機能した。

この文脈において、1993年に設立された「鄭州大学国際連携女子学院」は画期的意義を有する。婦聯系統の党学校「中華女子学院」から独立した初の女子大学として、鄭州大学傘下ながら独自の校舎・カリキュラム・教員陣・入学基準を備え、「体制内 NGO」と称された。李小江は NGO と GO (政府組織) の関係を次のように定義する：

「NGO の価値は『体制外』という形式ではなく、真に公衆のために事を成す点にある。この本質において NGO と GO は同一である」⁷⁰

ここで李小江は、「官か民か」よりも、「事をなし得るか否か」を重視している。「婦女研究」の「民間」性とは、そうした「事をなす」ことを最優先する実践から見いだされるものである。

以上を総合すれば、中国における「民間」を論じる際は、その特殊性を踏まえる必要がある。すなわち、社会主義体制下には資本主義社会でいうところの「市民社会」とは異なる構造があり、「民間」は政府との緊張関係を絶えず内在化しているが、完全に独立しているわけではない。こうした状況下で政府は「民間」の社会組織に障壁を課すこともある一方、政治的支援を与えることもある。李小江は「事をなす」ことを強調し、この組織を「脱政治化」しつつ、地方婦聯や政府部門と良好な協力関係を結んだ。こうした協力関係は「事をなす」プロセスを通じて育まれ、既に深く関わっていた地方婦聯は、中央婦聯が「鄭州会議」の開催中止を命じてもそれに逆らうだけの意志を形成した。かくして婦女研究の「民間」部分を十分に評価するには、中国の社会主義改革期における「政府／民間」の交錯を視野に入れねばならないのである。

3-3 第三段階——1993 年以降：「本土／民間」の融合と消滅

『告別昨天：新時期婦女運動回顧』は、李小江が 1983 年から 1993 年までの 10 年間に

わたる婦女研究運動を総括した著作である。本書において李小江は、婦女研究運動の「本土／民間」的特性をまとめあげたのち、筆を転じて、この時期の「運動」がすでに終了したことを正視しなければならないと主張する。そして、その後は新たな現実を直視し、「婦女運動」の主流もはや「分離」ではなく、「融合」であるべきだと説く。すなわち社会主義市場経済が全面的に展開する新時代へ融和的に参入することである。

「今日こそ、私たちが過去に別れを告げる時である……過去との別れとは、過去を新しいスタートの起点とすること……それは今日の現実を明晰かつ軽やかに直視するためである……新時期婦女運動の洗礼を経て、私たちはついに自らの運命の真の主人となる可能性を手にしたのである。」⁷¹

当時の李小江は非常に楽観的であったと言えよう。彼女が率先して設立した「鄭州大学国際婦女聯誼学院」は1994年に政治的圧力によって閉鎖を余儀なくされたものの、李小江は、この10年間の婦女研究運動によって、中国の「婦女研究」の領域に基礎が築かれたと信じていた。つまり、中国婦女はある集団として、ついに「自らの運命の真の主人」となる道を開き得たという認識である。鄧小平の南巡以後に確立した市場経済改革に対して、李小江は婦女研究や婦女運動が中国社会の変革プロセスへ自発的に「融合」していくべきであって、女性の「特殊な利益」をただ守ろうとする態度に固執してはならないと考えていた。

「もはや現行体制において婦女的特別な保護や特別な權益を求めるのではなく、社会構造が変化していく過程の中で主体的に発展の空間を切り拓き、婦女的發展をもって社会發展を直接に推進していくのである。」⁷²

この未来像においては、中国婦女は、すでに「民間／本土」を主体とする運動を通じて「婦女主体意識」を育んだとされる。ゆえに、より広い視野を「中国社会の変革」へ向け、自覚的に社会へ参与し、その發展を牽引すべきである、と李小江は展望している。ここでは、「民間／本土」を基調とした婦女研究運動が捨て去られたというよりは、「女性主体意識」の大前提として継承されたと見なせるであろう。李小江は、過去の経験を踏まえつつ、新たな姿で社会変革の大きなうねりに溶け込み、80年代の婦女研究運動がもたらした成果をさらに大きな舞台で發揮してほしいと願っていたのである。

しかし、2018年に李小江が過去20年の發展を振り返った際には、次のような懸念を示している。

「私たちは当初、婦女解放が先にあって女性主義が後に続く以上、後に生まれた女性たちは先人よりもいっそう賢明で自信に満ち、自立しているはずだと思っていた……ところが女性の現状は楽観を許さない……もっとも驚かされるのは(女性をめぐる)認識が全面的に後退していることで……新たな歴史条件下で、女性の自己認識の問題が再び大きく浮上している。」⁷³

(「新中国／新生代女性の『前世今生』」)

こうして 20 年後の現実に照らしてみれば、結局問題は再び 80 年代初頭の「女性の自己認識」へ戻ってきたかのようである。李小江のこの懸念はどこから来るのだろうか。筆者の見解によれば、1983 年から 1993 年にかけて「民間／本土」を特徴として成立した婦女研究運動の基本的合意は、多方面の影響にさらされて次第に揺らぎ、さらには改変されていった。この揺らぎこそが、「女性の自己認識」の問題が 80 年代の問題領域をいまだに脱しきれない大きな理由の一つである。歴史は李小江の想定どおりには進まず、一度は「女性主体意識」を確立したはずの中国婦女が、その後「自己認識」の懸念を完全には捨て去ることなく、「社会発展」への参加を進めるしかない状況に陥っていると言えよう。あるいは言い換えれば、李小江が「民間／本土」の「運動」という名で 80 年代の婦女研究を位置づけようとした試みそのものが、婦女研究内部に潜む多様性を象徴しているのである。

実際、参加者の多様性ゆえに、「運動」としての「婦女研究」は自律的に自らを維持できず、李小江にも「運動」の方向性をコントロールすることはできなかった。彼女は「本土／民間」のレベルで「運動」に枠組みを与え、それを足場として「婦女研究」を「過去との決別」へ導き、鄧小平が開いた市場経済の時代へ踏み出したいと願った。しかし、わずか 10 年という期間では「婦女研究」を理論的に十分強固な基盤へ成長させることはできず、1993 年以降に「社会性別(ジェンダー)」が導入される局面で勢いを失い、うまく対処しきれなくなってしまう。とりわけ李小江が構築した存在論概念である「有性の人」は、「gender」と高い類似性をもつにもかかわらず、後者が 1995 年の国連婦女会議(北京会議)を契機とする政府や婦聯の積極的な普及活動の後押しを得ていた。結果として「民間／本土」という原則だけでは「婦女研究」を強固に守る壁を築けなかったのである(『中国女人: 跨文化対話』p.5)。さらに「gender」の概念普及とともに、「本土」と「民間」という語の含意そのものも再定義の危険にさらされた。1995 年以降、「本土」をめぐる用語上の論争は李小江の主要な闘争領域となり、一方、かつては「掛け持ち」を通じて政府との有機的協力を保っていた「民間」の婦女組織(社会組織)も、多くの要因によって従来の枠組みを離脱し、「NGO」という市民社会的な性格へと移行していく。これらの変化は、「本土」婦女理論の源泉たる「婦女研究」が、時代の変遷と外部からの衝撃にいかに脆弱であったかを示すとともに、その経緯を再考する意義を私たちに教えてくれる。

3-3-1 「本土」に基づく論争と「社会性別」の導入

1992 年のハーバード会議終了後、「海外中華婦女学会」の数名のメンバーは「gender」に対する見解の相違から李小江との対話こそ不調に終わったものの、同じく会議に参加していた別の中国婦女研究者である杜芳琴教授とのあいだに協力関係を結ぶことに合意した。両者は翌年に共同の研究会を開催することを取り決め、1993 年 7 月、杜芳琴が所属する天津師範大学婦女研究センターが「海外中華婦女学会」とともに「中国婦女と発展——地位・健康・就業」をテーマとする研修会(以下「天津研修会」)を開催し、正式に「gender」の概念を中国の婦女研究に紹介した。研修会では、あらかじめ海外中華婦女学会の五名のメンバー

が選んだ 16 編の欧米論文を天津師範大学婦女研究センターが国内の研究者と共に翻訳し、それらを一冊に編集した教材が配布された。教材は『婦女と発展：地位・健康・就業——西方の視角』と題されており、そこからもうかがえるように、杜芳琴は欧米の研究成果をそのまま無条件に導入するのではなく、「西方」と「本土」の文脈の違いへの注意を呼びかけている。本書の前書きでは「世界的な視野」の必要性を強調すると同時に、「西方の女権主義がどこにおいても通用する万能薬などではなく、各国・地域が自らの歴史と国情に即して独自の婦女解放の道を探求すべきであり、そのために婦女と性別に関する本土化した学術研究が必要である」と述べられている。

このような表現を見れば、杜芳琴もまた、外来の理論受容にまったく無防備であったわけではない。しかし、キーワードの理解という点での微妙な差異が、研究の進路を大きく分けることになる。著書の中で杜芳琴は、自身が考える「本土化」について次のように述べている。

「中国のいかなる学問分野であれ、外来の理論や概念、方法を参照し導入してこなかったものはない。理論や概念、方法とは本質的に道具であって、使えそうであれば使えばよく、不要ならば捨てればよい。より重要なのは、外来の知見を借りたとしても、すでに自分たちが有しているものを捨てるわけではなく、それを組み合わせ、接ぎ木し、やがて本土独自の理論を創造して自らの問題を解決することである。さらに言えば、本土を研究するだけでなく、それを世界が共有可能な知識として提供することが望ましい。」⁷⁴

このように「持って来いの(拿来)」な外来理論受容の態度は、一見すると自国のニーズに合わせて外来理論を取捨選択できる柔軟な方法論のように思える。しかし「本土化」が注目するのが「本土と海外の相互関係」そのものに移ると、外来理論が含むイデオロギーが、逆に「本土」理論資源を再構築するおそれがあるという問題が浮かび上がる。これに対して李小江は「本土的」という概念を創出し、「本土化」が引き起こす「本土」資源の再編を阻止しようとしたのである。

「私たち自身の立場に立つならば、『本土的』とは、外部世界とやり取りをする際に生まれる概念であり、この土地がもつ歴史・文化・人文・社会的特徴に根ざすことを強調するものである。不可避の『近代化』過程において、『全面的な西洋化』をできるだけ回避しようとするわけである。」

「『本土化』が強調するのは『本土』それ自体ではなく、『化』のほうであり、つまり西洋の価値体系が他の地域や人々に広がり、浸透することである。したがって『本土化』の主題は依然として『西洋』であり、いかなる『本土』の事柄でもない。」⁷⁵

表面的には「全面的西洋化」を避けるという点で、李と杜、ひいては同時代の「本土」学者たちは同じ立場に見える。しかし、理論的「独立性」の認識において彼らのあいだには大きな食い違いがある。この差異が、のちの研究者たちの理論的立場や研究路線に実質的な影響をもたらし、「本土的」が象徴していた理論資源を意図せず侵食し、ひいては李小江が憂慮する婦女研究における「ポストコロニアル(後植民地)」現象を引き起こす要因となったと言

えよう。

3-3-1-1 「gender」の導入と「社会性別／性別」の翻訳論争

「gender」という語が中国の婦女研究の文献に初めて登場したのは、1991年に李小江が編集した叢書『婦女研究在中国』に収録された、海外中国人研究者・周顔玲によるアメリカ現代研究動向の紹介記事である。この時点では「gender」は「性別」と訳されており、当時の中国研究者は必ずしも専用の訳語を設けていなかったことがうかがえる。ところが先述の天津研討会において、海外学会側が推薦した16編の論文を中国側が翻訳した際にはいずれも「gender」は「性別」として訳されていたが、研修会場で海外中華婦女学会の6名のメンバーが「gender」概念を紹介する際には初めて「社会性別」という訳語を提唱したのである。

ここには、海外学者が中国へ「gender」を紹介する過程で、「従来の『性別』という訳語と区別をつけよう」という能動的な意図が働いている。これについて「社会性別」の訳を主張した王政は、以下のように述べている。

① 理論上、「生物学的性別(*sex*)」と「社会性別(*gender*)」を区別することは可能である。社会性別は社会文化的に形成された男女の期待や特徴、行動様式の総体を示す。

② 社会性別は男女間に存在する社会的関係であり、本質的には不平等な権力関係である。⁷⁶

つまり王政は、英語圏で区別されている「*sex*」と「*gender*」を理論上反映させるために、「*gender*」を「社会性別」と訳すことを提起したのである。もし単に「性別」と訳してしまうと、英語圏で「*sex*」と呼ばれる領域との区別がつきにくいというわけだ。学术交流上の便宜を考えると、王政の議論には合理性があると言えよう。しかし中国語における「性別」という単語の内在的含意からすれば、意図的に「社会性別」と「生理的性別」に分割することは、「性別」という言葉本来の意味を歪める可能性がある。

李小江は「社会性別」の訳に反対する根拠として、彼女が創案した「有性の人」という概念を例に挙げる。「有性の人」は、「社会と性徴」の両面を兼ね備えたものとして女性(または男性)をとらえる理論構造を指す。漢語では「女人」あるいは「男人」という言葉自体がすでに社会性と性徴の双方を暗示することから、わざわざ「社会性別」なる訳語を導入するのは蛇足にすぎないとする主張である。

『女人』(あるいは『男人』)という語義自体が、すでにその社会性と性徴を示している。つまり『有性の人』……漢字では『女』も『男』もいずれも『人』に随伴しており……たとえば婦女解放がいかに進展しても、用語の使い方において再革命を起こす必要はない……『社会性別』という概念を取り入れるのは、漢語において『蛇足』にも等しい。⁷⁷

表面的には、李小江は単なる訳語の議論をしているに過ぎないようだが、実際には

「gender」が中国で普及していくこと自体を抑止しようとする意図がうかがえる。「gender」概念が導入されるより前に、李小江は「有性の人」という理論枠組みにおいて、すでに「gender」が占め得る理論上のポジションを先取りしていたのである。彼女の考えによれば、中国語の「女人」という言葉(すなわち「有性の人」)は、社会的な「人」に性徴を付加するかたちで「社会と性徴」を一体としてとらえる。もし「gender」を「性別」と翻訳すれば、それはそのまま「有性の人」のより高次元の理論枠組みに統合可能であり、「本土」に根ざした婦女研究の完結性が維持されたと考えたのである。逆に王政が強調するように「性別」を「社会性別」と「生理性別」とに分割してしまうと、そもそも「性別」がもっていた社会的側面が空洞化し、「有性の人」が前提とする理論上の一体性が損なわれてしまう。しかも、その社会的側面には「本土」理論を組み立てる上での可能性が秘められているというのが李の主張である。

この点から、李小江は「gender」を「社会性別」と訳す動きに対して、西洋の強いイデオロギーが中国に流入する一種の「強引な普及」として危惧している。

「言説(ディスコース)は人と同じく孤立して存在するものではない。それは必ずある特定のイデオロギーに帰属している。この意味において、もしイデオロギーがそもそも権力の性質を帯びているのであれば、『言説』は『意識』と現実、『思考』と行動という二重の狭間において『錯位』を生じさせ得る。」⁷⁸

李小江によれば、もし「gender」を「社会性別」と翻訳するならば、それは中国の「本土」理論資源から離れ、西洋が優勢なイデオロギー環境下で流通する単なる「意識」へと変質してしまい、「思考」と「現実」を乖離させる恐れがあるという。こうした懸念は決して的外れではなく、実際 1995 年の第 4 回世界婦女会議(北京会議)の際、中外の交流において生じる言語・概念の混乱を少しでも減らそうと、「海外中華婦女学会」の譚競嫦と信春鷹は『英漢婦女与法律詞匯釈義』を編纂し、会議開催直前の 1995 年 8 月に刊行した。その書中で「gender」は「社会性別」、「sex」は「性別」と明確に区別され、世界婦女会議を通じて「社会性別」という訳語が広く普及する流れが形成されたのである。この結果、「gender」の訳語としての「社会性別」が「性別」を次第に駆逐し、さらには「性別」が本来持っていた「本土」固有の意味領域も葬り去られた。現代では「性別研究」と言えば、ほとんどの人が自動的に「gender study」を想起するが、それは実質的に「社会性別研究」の略称として認識されているにすぎない。「有性の人」という理論枠のもとで「性別」が持っていた独自の含意は、このようにしてほとんど忘れられてしまったのである。

3-3-2 「民間」に基づく論争と「民間婦女 NGO」の発展

前節で述べたように、1983 年から 1993 年のあいだに李小江が創設した婦女研究組織は、「掛け持ち」と呼ばれる形態を通じて政府との連携と政治的な正統性を獲得していた。これは李小江に限らず同時代の事例でも見られる。例えば、高小賢が 1986 年に西安で立ち上げた「陝西省婦女理論婚姻家庭研究会」(以下「婦研会」)は、陝西省婦聯に「掛け持ち」

していた。また 1988 年に王行娟が設立した「北京管理科学院婦女研究所」は、管理科学院に「掛け持ち」していた。これらの婦女研究組織はいずれも政府機関に形式上は「掛け持ち」して政治的承認を確保していたが、実質的には独立運営を行い、資金は完全に自己調達で賄うという点で共通する⁷⁹。つまり、政府との「政治上の特許的關係」以外にはほとんど「非官办(非政府設立)」の性格が強かったのである。しかし、こうした特性をもつ「民間」の婦女組織は、1995 年の世界婦女会議に際して微妙な立場に追い込まれ、80 年代に盛り上がった婦女組織は 90 年代以降大きな衝撃を受けて、その多くが「掛け持ち」から離れ、NGO やその他の社会組織へ形態を変えざるを得なくなる。転換点となったのは、1993 年末にフィリピン・マニラで開かれた「アジア太平洋 NGO 婦女発展研究会議(通称マニラ会議)」である。2 年後の北京世界婦女会議に向けた準備の一環であったこの会議に、中国側の代表として出席したのは全国婦聯であった⁸⁰。全国婦聯は共産党の下部組織であるものの、その性格としては「半官方・半民間」の社会群众団体であると自認していた。李小江らが設立した婦女組織も、この定義に従えば全国婦聯と同列にあるはずだが、会議の場で各国 NGO の参加者が全国婦聯代表に対して「あなたたちは政府を代表しているのであって、民間の声を代弁する資格はない」と厳しく指摘したのである。これにより「NGO 領域での全国婦聯の政治的正統性」は海外から否定される格好となった。さらに海外では、李小江らが立ち上げた婦女組織のほうこそが「正真正銘の NGO」とみなされ、1994 年 2 月には国連 NGO 本部が第 2 回世界婦女会議の準備会議に李小江を招待している。李小江自身は問題の特殊性に気づいて招待を辞退したが、「民間」の婦女組織は既に国際社会からは独立した NGO として認知されつつあり、従来のような「掛け持ち」に基づく政治的立場を維持することが困難な局面を迎えたのである⁸¹。

これは全国婦聯と「民間」婦女組織との関係を公然化し、誰が政府外の中国婦女を代表できるかという政治問題を露呈させた。全国婦聯にとって、自分たちは国家機構ではなく、深く地方組織に根を張る大衆団体である以上、「政府外」の組織として婦女を代表する資格を有すると認識していた。さらに「代表権」は政治的に重大な問題であり、自分たち以外の「民間」組織がそれを上回る権威を持つことは容認できない。それゆえ李小江らの「民間」婦女組織は、「NGO 代表」として全国婦聯とともに立場を示すよう迫られ、結果として婦聯の政治的枠組みに組み込まれるような形をとらざるを得なくなったのである。

李小江はこの圧力に際し、自身が率いる組織を「NGO」と名乗って政治論争に巻き込まれる気はなかったものの、同時に「民間婦女組織」としての認識を堅持し、政府側に立って大会に参加する意欲も示さなかった。そこで 1993 年から 1995 年にかけてハーバード大学に客員研究員として滞在し、第四回世界婦女会議への出席を避ける選択をとった。

「国家と婦女のはざまで、中国女人として私にできることは沈黙しかなかった……国家の一員である個人として、もはや『異なる声』を発することはできない。この状況下で、『大局を顧みる』とは何を意味するのかが私にははっきりしていた。婦女問題においてこそ、私は『消える』しかなく、沈黙を守らざるを得なかったのである。」⁸²

こうして「民間」立場を貫く代償はあまりにも大きかった。1993年に李小江が創設した「鄭州大学国際聯誼女子学院」は1994年に政治的圧力で閉鎖に追い込まれ、同様の圧力は他の「民間婦女組織」にも及んだ。80年代以来「本土」に根ざし、「掛け持ち」を通じて政府と有機的協働を行ってきた「民間」組織のモデルは大きく揺らいだのである。しかも1995年の世界婦女会議を機に、「NGO」という概念とその組織形態が中国に本格的に導入されると、こうした「民間婦女組織」は政府の支援や後ろ盾を欠いたまま、外国の財団からの資金援助に頼る形で活動を継続せざるを得なくなり、「項目（プロジェクト）ブーム」と呼ばれる状況を招いた。その結果、「民間婦女組織」は「民間婦女 NGO」へと衣替えし、海外基金会や西洋の NGO との関係のなかで別の道を進むことになる⁸³。否定できないのは、95年の世界婦女会議による衝撃で、それまでの「民間」組織モデルが根底から書き換えられたという事実である。以前は「民間」の背後には「本土資源」しか存在せず、「事をなす（做事情）」ことこそが生存基盤であった。しかし NGO という理念と海外基金が流入すると、「民間 NGO」は文字通り「海外資金」に生存の基盤を求めざるを得なくなり、「独立性」の問題を新たに抱え込むことになる。国家から離れたことで自律性を獲得したかに見えて、実際には別の形で「支配」されるリスクに陥る可能性が出てきたのである。

3-3-2-1 「発展」 discourse における「民間婦女 NGO」

1995年の北京世界婦女会議は、海外の言説が中国へ進出するうえで絶好の機会となった。西洋諸国がこのグローバル会議で戦略的に目指したのは、「中国が世界を認知する」プロセスの促進であり、その実践の主要な担い手として中国婦女を位置づけることであった。「中国婦女の発展を支援する」という物語のもと、西洋の援助システムは二つの経路をとって浸透していった。一つは「対外的育成プログラム」を実施し、北京を中心とする知識女性に国際交流を重点的に支援することである。もう一つはプロジェクト資金の枠組みを用意して地方の婦女 NGO を後押しし、とりわけ貧困地域の基層機関の設立・運営を助成するという方法である。学界の中で長らく周縁的な地位にあった女性知識人や、政策転換によって資源が枯渇していた民間婦女組織にとって、これは飛躍的発展の契機となった。結果として、マイノリティであった女性知識層が、国際化においてもっとも顕著な進展を示すという現象が生まれたわけである。

高小賢の回想によれば、90年代後半に中国国内の婦女研究者は、多くが海外の財団による「発展プロジェクト」と密接な協力関係を築いていた。たとえば「北京大学婦女研究センター」の蔵健は寧夏で少数民族の女兒教育プロジェクトに携わり、「鄭州大学婦女研究センター」の李小江は河南婦干校や雲南婦干校のメンバーを率いて雲南でリプロダクティブ・ヘルス（生殖健康）プロジェクトを行った。あるいは「天津師範大学婦女研究センター」の杜芳琴は河北省定県を調査し、「華北農村の婦女の行動様式に影響を与える文化的要因」を研究した。さらに「中国社会科学院社会学研究所」の譚深は、出稼ぎ労働する女性（打工妹）の調査と支援を進め、広州や四川で十年以上にわたって活動を継続した⁸⁴。これらの協力

関係は、鮮明な理論-実践複合特性を呈している。単純に「ジェンダー」概念を移植するものとは異なり、その中核的枠組は「社会性別と発展(GAD)」の統合パラダイムにある。このパラダイムは「社会性別」理論と「発展」理論を融合させ、社会主義的女権主義理論と第三世界の実践経験を統合しつつ、社会性別の制度的構築性を解体することを主張する。

高小賢の回顧によれば、「発展」理論には自由主義的女権主義に基づく WID (Women in Development) パラダイムとマルクス主義(階級分析を重視)に立脚する WAD (Women and Development) パラダイムが存在した。しかし GAD パラダイムは、海外中華婦女学会メンバーの積極的推進によりより広範に普及し、国際協力において最も常用される標準化操作テンプレートとして応用された⁸⁵。

しかしながら、こうした「発展」援助に対して、李小江は 2000 年に過去の「プロジェクト」経験を振り返り、GAD パラダイムそのものが内包するポストコロニアル的な危うさを指摘している。

「彼らは『ポストモダン』が『発展途上国』に上陸すること自体が、『ポスト植民地主義』の大きな原動力にもなり得るという認識をもっていない……『発展』という旗印のもと、『経済援助』(資金)と『文化交流』(言説)を手段として、それは何の障害もなく“発展途上国”に直接入り込み、直接作用を及ぼせる……『援助』の中で『本土』の『主体性』を宙に浮かせ、その内在的エネルギーや自主性、そして本来なら世界に提供し得る多様性をまったく失わせてしまうかもしれないのである。」⁸⁶

ここで李小江が議論の相手とみなしているのは、欧米による一方的な「言説支配」に対して高度な警戒心を持ち、GAD の手法や概念をそのまま中国の「発展」プロジェクトに当てはめることを極力避けようとした「海外中華婦女学会」のメンバーたちである。本質的な問題は「GAD が中国に適用可能か否か」ということではなく、「発展」という概念それ自体が「GAD」の名のもとで拡散される時、「本土」資源を窒息させてしまう潜在的可能性を秘めているという点である。これによって“発展途上国”は「GAD」以外のパラダイムを考案する道を断たれ、いわゆる「本土」の理論-実践モデルを形成する機会を失ってしまう。

さらに「GAD」型プロジェクトに代表される「発展」協力には、海外財団に依存する財政面からのリスクもある。外国の基金に依拠しすぎることによって、「民間婦女 NGO」が自律性を損なうおそれがあるのである。高小賢が 2018 年に回想したところによれば、2000 年頃に結成された「GAD ネットワーク」は資金提供者の選択を誤り、その後常に資金提供者に振り回される形になってしまい、自らの独立性を失ったという。

「今振り返ると、一番の後悔は最初から GAD ネットワークの資金提供先を誤ったことである。そのせいで GAD ネットワークはずっと資金提供者に鼻面を引き回され、自らの独立性を保てなくなってしまった。」⁸⁷

具体的には、陝西婦研会の方針は 2000 年代以降に大きく転換し、もともと取り組んでいた婦女の健康やDVなどの領域を超えて市民社会にかかわる活動へ広げていった。しかし、こ

のプロセスで「民間婦女 NGO」は「婦女／家庭」という本来の領域への関与を減らし、あまり関連のないコミュニティの行政や社会的ガバナンスの問題へ注力するようになってしまったのである。

4. 終わりに

4-1. 本研究より得られた知見

本研究の問題意識から出発し、筆者が答えようとした核心的な問いは、「何が『婦女研究運動』の歴史を覆い隠したのか」、そしてその遮蔽を明らかにすることで「どのような新しい歴史的想像を得られるか」というものである。このため、筆者は「歴史を遮蔽する研究方法」と「歴史そのものの発生学的プロセス」という二つの次元から、「用語の発生」を手がかりに、中国の「婦女運動史」研究枠組みと「婦女研究運動」の歴史的発生学に対し、「歴史的内在視野」という方法論に基づく考察を行った。第二章・第三章の議論は、いずれもこの問題意識を軸に展開されている。

第二章では、まず婦女連合会(婦連)および学界に存在する「婦女運動史」に関する歴史研究を列举し、その特徴をまとめた。婦連の歴史叙述は、その「政治的指向性」ゆえに、基本的に中国共産党史と整合性を持つ。一方学界では、トーマス・クーンの「パラダイム」理論を基盤に、学界で一般的な歴史研究を二類型に分離した。第一は「社会性別(ジェンダー)」パラダイム、第二は「マルクス主義的婦女解放理論」パラダイムである。まさに「パラダイム」の意義において、前者は後者を代替し、現在の中国「婦女運動史」研究の主流パラダイムとなった。後者の現代的意義は、「社会性別」パラダイムへの反問、および改革開放前の社会主義的婦女解放期に対する再評価の衝動に由来する。両理論パラダイムの相互作用の下、歴史の相貌はパラダイム間の転換過程として表象され、各歴史的出来事には特定の「パラダイム」が形容詞として付与される。つまり、「パラダイム」に基づく歴史的想像の下で、「パラダイム」という理論出発型の研究方法が、歴史的出来事の発生過程に内在する開放性を窒息させたのである。「用語旅行」は、この「パラダイム」型歴史的想像が歴史的現実を窒息させる証左として観測された。

この文脈で、筆者は宋少鵬の「歴史的内在視野」を新たな研究方法として借用し、「パラダイム」型研究方法が構造化した歴史認識への批判を試みた。ここまでで、筆者は「何が『婦女研究運動』の歴史を覆い隠したのか」という問いの前半に回答した。すなわち、理論から出発し、歴史的行動者の活動や歴史的出来事の発生学的プロセスを軽視する「パラダイム」型歴史研究が、「婦女研究運動」に対する過小評価を生み出したという結論である。

第三章において、筆者は「歴史的内在的視野」を研究方法として、「婦女研究運動」の歴史的発生学過程の考察に着手した。「民間/本土」という用語の生成を手掛かりに、「婦女研

究運動」の展開過程を三つの段階——「民間/本土」生成以前・形成期・形成後の課題とシニフィアンの変容——に区分した。

第一期では、婦女研究の最初の開拓者である李小江の一連の初期論文(「婦女解放」「女権主義」「恩賜/超前論」「有性の人」等の用語使用)を検証し、この段階の婦女研究が主たる対話対象を従来の「マルクス主義婦女解放」理論及び実践に置いていたことを指摘した。発生源流的観点から、当該研究は外部理論の流入による二次的問題ではなく、本土的経験に基づく「本土性」を有していたと結論付けた。

第二期では、李小江が 1989～1993 年に実施した研究外活動の具体的記録を分析し、総体としての婦女研究「運動」がまさにこの時期に遡及的構築され、1995 年の単著『昨日に別れを告げて』において初めて言説化されたことを明らかにした。この遡及的構築過程において、1980 年代の「婦女研究」は初めて「運動」の名称を与えられ、「民間/本土」の性質を付与されることで、歴史における統一的な相貌を獲得する「事件」性を帯びるに至った。

第三期(1993 年以降)では、「婦女研究運動」の「民間/本土」という二重面向が多方面で挑戦を受けた。その「本土性」に関しては、「ジェンダー」概念の導入過程において「用語翻訳」の支配権を漸次喪失し、「gender」の訳語をめぐる論争において「社会性別」訳の定着が、1980 年代に李小江が確立したより「本土的」特色を有する「有性の人」概念が置換される歴史的プロセスを象徴的に示した。

他方では、本土資源への依存と「掛け持ち」的な「婦女社会組織」から、外国基金による資金援助を受ける「民間婦女 NGO」への転換は、経済的・政治的な二重の意味において「民間」性のシニフィアンの変容を体現した。第三章の論述を通じ、筆者は「婦女研究運動」という歴史的事件そのものが孕む可能性を明らかにした。「パラダイム」型の歴史的想像において、「婦女研究運動」は単に「社会性別」が中国に伝来する前触れとされるか、あるいは直接「社会性別」(「女権主義」)自体の一部に吸収されるに過ぎない。しかし実際には「婦女研究運動」は、「民間/本土」の次元において独自の問題意識と潜在的な発展脈絡を有していたのである。問題意識の次元から見ると、「婦女研究」とは、「マルクス主義婦女解放」の理論と実践を批判的に継承しようとするために、その反省を通じて新たな視座を得ようとする試みである。その発展の脈絡において、「婦女研究」は同時代における西洋の女性主義理論や、婦聯などの政府部門との緊張関係の中に絶えず置かれており、「本土/民間」の二つの方向での相互作用を通じて、相対的な独立性を維持してきたと言える。ゆえに、「婦女研究」は単に「社会性別」や「マルクス主義婦女解放理論」のどちらか一方の一部にすぎないものとしてみなされるべきではなく、80 年代の中国思想界が、旧来の社会主義イデオロギー構造が漸次崩壊していく状況下で、これを批判的に継承しようとした学術的・政治的努力として捉える必要があるのである。

しかしながら、90 年代に入り中国が西欧社会と全面的に「接軌」していく流れの中で、「婦女研究運動」は最後まで徹底されるには至らない運命をたどったのである。

以上を総合すると、本研究は現行の研究に対して以下の三点にわたる理論的貢献を提供し得ると筆者は考える。

第一に、当代中国の理論研究界における「婦女運動史」の研究を分析するにあたり、「パラダイム」理論に基づいた分析枠組みの仮説を提示した点である。

第二に、宋少鵬が提唱する「歴史の内在視野」という研究方法を踏まえつつ、その研究内容をさらに細分化・区別・拡張するとともに、一部の分析結果を否定しつつも、「李小江」の思想的脈絡を単独で整理した点である。

第三に、「婦女研究運動」における「本土／民間」面向を単独に考察することにより、この「運動」を歴史生成論(歴史的生成プロセス)に基づく言説として構築し得た点である。

4-2. 本研究の限界

以下は、「婦女研究運動」の「用語生成」をめぐる貢献以外の面において、本研究にさらに磨きをかけ得る論点である。

第一に、1980年代の「婦女研究」の理論的背景を検討する際、李小江の論文や著作の分析に過度に依拠しているため、同時代の理論家との相互作用という文脈で李小江の研究を位置づける論述がやや不足している点である。ここには大きく二つの問題が含まれている。

一つは、李小江が2012年に明確に提示した「婦女研究」と「新啓蒙運動」との理論的関連性である。筆者は「新啓蒙運動」の重要な理論家として知られる李沢厚などを深く考察しておらず、この点については先行研究の知見に依拠するにとどまっている。

もう一つは、李小江が1987年に刊行した「婦女研究叢書」の問題である。このシリーズには十数名の研究者による著作が含まれ、それぞれが異なる観点で「婦女」について考察している。ところが筆者の議論では、これら学者の主張や著作内容を包括的に参照してはおらず、各著者が自書のために記した序文に基づいて大まかな思想脈絡を把握するにとどまっている。ここには学術的にさらなる探求の余地が残されている。

第二に、筆者は1993年以降の「婦女研究運動」における「本土／民間」面向が直面した挑戦について十分に論じられていないため、説得力のある結論を示すには至っていないという課題がある。「本土」をめぐる論争の背景には、「性別／社会性別」をめぐる議論に加えて、その後の学科建設のプロセスで浮上した「婦女／性別、婦女／社会性別」の問題も存在する。とりわけ「民間婦女 NGO」を論じる際、NGO 組織と外国の基金会や各地の政府との具体的ななかかわりを適切に検証できていない。たとえば高小賢の回想によれば、「GAD」の言説のもとで、2000年前後に民間婦女 NGO が展開した活動は非常に「本土」的な特徴を備えていたという。この点からは、理論的研究とは別の位相における「本土」性の手がかりが示唆されるように思われるのである。

5 參考資料

- [1] 中華婦女連合會 HP :<https://www.women.org.cn/>
- [2] 陳佳俊. 群团组织改革研究[D]. 浙江大学, 2018, p10.
- [3] 同上. p25
- [4] 顧秀蓮. 20 世纪中国妇女运动史[M]. 北京. 中国妇女出版社. 2013
- [5] 本书编写组. 中华人民共和国简史[M]. 北京. 人民出版社. 2021
- [6] 杜芳琴. 三十年回眸: 妇女/性别史研究和学科建设在中国大陆的发展[J]. 山西师大学报(社会科学版), 2008, (06): 4-11.
- [7] Zheng, W. (2017). Finding Women in the State: A Socialist Feminist Revolution in the People's Republic of China, 1949-1964(1st ed.). University of California Press. p242-245
- [8] Tani E. Barlow. (2004). The question of Women in Chinese Feminism. by Duke University Press. p256-260
- [9] 李旭. 李小江女性主义理论研究[D]. 西华师范大学, 2016.
- [10] 同[7]. p302
- [11] 陳曦. (2020). “妇女”的边缘与重振: 改革开放以来学术反思视域中妇女解放话语的流变. 湖北社会科学(03), 49-58. doi:10.13660/j.cnki.42-1112/c.015324.
- [12] 柏棣. (2013). 性别的政治: 谈“社会性别”概念的不确定性. 山东女子学院学报(05), 1-6.
- [13] 宋少鹏. (2012). 资本主义、社会主义和妇女——为什么中国需要重建马克思主义女权主义批判. 开放时代(12), 98-112.
- [14] 柏棣(2012). 21 世纪中国女性文化本土化建构研究报告集成. 现代出版社, 10-26
- [15] 郑颖. (2020). 建国 70 年来海外视域中的中国妇女解放. 社会科学论坛(02), 125-136. doi:10.14185/j.cnki.issn1008-2026.2020.02.017.
- [16] 李小江. 女性? 主义——文化冲突与身份认同[M]. 江苏人民出版社. 2000. 284-286
- [17] [18] [19] [20] [21] 鄭威鵬 (2007). 性別話語的協商：中國當代婦女研究對女性主義話語的接受與建構(1980-2000)
- [22] 宋少鹏. (2018). 立足问题, 无关中西: 在历史的内在脉络中建构的学科——对中国“妇女/性别研究”的思想史考察. 妇女研究论丛(05), 33-51.
- [23] 高小贤 & 宋少鹏. (2020). 社会性别进中国: 历史进路与理论反思. 中共历史与理论研究(01), 166-180+2.
- [24] [25] [26] 同[22]

- [27]李小江.馬克思主義婦女理論的研究起點和要點.未定稿.1984 年第 1 期.7-17
- [28]同上
- [29]李小江.(1983).人类进步与妇女解放.马克思主义研究(02),142-166.
- [30]王玲珍.(2015).重审新时期中国女性主义实践和性/别差异话语——以李小江为例.南开学报(哲学社会科学版)(06),103-118.
- [31]李小江.女人的出路.沈阳.辽宁人民出版社.1989.125-127
- [32]同上 110-115
- [33]同上 67-70
- [34]李小江.夏娃的探索.郑州.河南人民出版社.1988.236-239
- [35]同[31]135
- [36]同上 136
- [37]同[17]78
- [38]同[31]
- [39]同[17]85
- [40]李小江.身临“奇”境——性别, 学问, 人生.南京.江苏人民出版社.2000.15
- [41]李小江.走向女人——新时期妇女研究纪实.郑州.河南人民出版社.1994.58
- [42]李小江.譚深.妇女研究在中国.郑州.河南人民出版社.1991
- [43] [44]同[41]100
- [45]李小江.李小江回复给唐凌的信——学术精神.
- [46]李小江.告别昨天——新时期妇女运动回顾.河南人民出版社,1995
- [47],[48],[49],[50],[51]同上
- [52],[53],[54],[55]同[41]
- [56]李小江.(2012).对话白露:关于 1980 年代“妇女研究运动”——由《中国女性主义思想史中的妇女问题》说开去.山西师大学报(社会科学版)(06),1-8.doi:10.16207/j.cnki.1001-5957.2012.06.030.
- [57]李小江.女性? 主义——文化冲突与身份认同[M].江苏人民出版社.2000.1-5
- [58],[59]同上
- [60]Zheng, W. (1998). Research on women in contemporary China. Guide to women's studies in China, 1-43.
- [61]李小江,对话汪晖:管窥中国大陆学术风向与镜像(1990~2011)[M],社会科学文献出

版社,2014

[62][63]李小江,婦女研究運動—中國個案,香港,牛津大学出版社,1997

[64]罗琼.让中国妇女运动的历史告诉现在,中国妇女报,1989年12月25日

[65]同[41]67

[66],[67],[68],[69],[70]李小江,婦女研究運動—中國個案,香港,牛津大学出版社,1997

[71],[72]告别昨天—新时期妇女运动回顾:河南人民出版社,1995

[73]李小江.(2018).新中国/新生代女性的“前世今生”.山西师大学报(社会科学版)(05),103-106.doi:10.16207/j.cnki.1001-5957.2018.05.018.

[74]杜芳琴,妇女与发展地位,健康,就业—西方的视角,天津师范大学妇女研究中心,1993

[75]李小江.(2005).全球化背景下中国妇女研究与国际发展项目——兼谈本土资源和“本土化”问题.云南民族大学学报(哲学社会科学版)(01),31-37.

[76]同[23]

[77]李小江.(1997).我们用什么话语思考女人——兼论谁制造话语并赋予它内涵.浙江学刊(04),81-86+91.doi:10.16235/j.cnki.33-1005/c.1997.04.030.[78]同上

[79]董一格.(2014).民间妇女运动的缘起与“NGO化”.中国发展简报(03),31-34.

[80]孔孟仁.(1994).马尼拉妇女盛会.中国妇女管理干部学院(02),68.doi:10.13277/j.cnki.jcwu.1994.02.021.

[81]李小江,关于女人的答问,南京,江苏人民出版社,1997,68

[82]李小江,我为什么拒绝参加世妇会,明报月刊,1995,81

[83]高小贤,谢丽华.中国妇女 NGO 成长进行时.北京.金城出版社.2009

[84],[85]高小贤 & 宋少鹏.(2020).社会性别进中国:历史进路与理论反思.中共历史与理论研究(01),166-180+2.

[86]李小江.(2000).50年,我们走到了哪里?——中国妇女解放与发展历程回顾.浙江学刊(01),59-65.doi:10.16235/j.cnki.33-1005/c.2000.01.011.

[87]同[84]